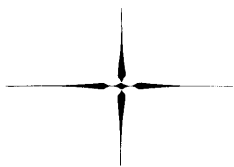


日本革命的共産主義者同盟（革マル派）機関誌

# 共産主義者 総目次

創刊号1959年1月～第100号1986年1月



解 放 社

東京都新宿区早稲田鶴巻町 525-9

☎207-1261 振替／東京7-144115

# こぶし書房 発行図書

『資本論』と現代資本主義	松代秀樹	定価 2600円・
減量経営とは何か	黒金哲男	定価 1700円
石油危機下の日本経済	松代秀樹	定価 2400円・
現代帝国主義の腐朽	波多野玄	定価 2200円・
ドル危機 国際管理通貨制の終焉	吉本龍司	定価 2400円・
字野経済学との対決	松代秀樹	定価 2100円
現代日本労働運動論 (上・下)	藤原隆義	定価各3500円・
革命的左翼の思想	藤原隆義	定価 3500円・
鄧小平の中国	半沢 貫	定価 2400円・
周恩来の中国	半沢 貫	定価 1500円
参加・自主管理の思想	篠田 剛	定価 1700円
自主管理革命の幻想	片桐 悠	定価 1700円
革命なき革命の悲劇	酒田誠一	定価 1800円
中ソ代理戦争	酒田誠一	定価 2800円・
革命の放棄 日共の変質の完成	森山伸夫	定価 2200円・
現代日本のナショナリズム	葉室真郷	定価 2400円・
梯明秀との対決	村上文男	定価 2000円
ソ連圏革命論ノート	黒田寛一	定価 2400円・
二十世紀文明の超克	黒田寛一	定価 2000円
革新の幻想	黒田寛一	定価 1500円
変革の哲学	黒田寛一	定価 1500円
呪縛からの解放	黒田寛一	定価 2000円

東京都新宿区早稲田鶴巻町525 15 ☎(03)207 0928 振替・東京9 105847

（御注文は最寄りの書店へ。直接申込は〒250円・送料300円）

# 共産主義者 総目次 創刊号(1959年1月)～第100号(1986年1月)

<b>第1号 (1959年1月)</b>	品切	岡田 新	ブンドの破産と革命的プロレタリアの同盟・革共同全国委員会
無署名	第四インターの旗は不滅である	緑川俊成	書評：トニー・クリフ『ソ連官僚制国家資本主義論』
春田啓郎	労働者階級の当面する課題と春闘	北川 登	戦後革命の敗北——戦後日本労働運動史(1)
草野道夫	ある同志たちへ	広田 広	ハンガリア革命論
ミシエル・パブロ	第四インターナショナルの二十年	<b>第5号 (1962年1月)</b>	品切
<b>第2号 (1959年9月)</b>	品切	黒田寛一	崩壊するスターリン主義と前進する革命的反戦闘争
	わが同盟綱領草案の討議のために	無署名	参議院選挙に対する革命的共産主義者の立場
無署名	日本革命的共産主義者同盟綱領・M草案	無署名	政治情勢とプロレタリアートの任務
緑川俊成	“共産主義者同盟”の本質はなにか？	田宮健二	革命的共産主義運動の現段階と革命的プロレタリア党創造の課題(2)
加藤玲治	共産主義者同盟葬送の辞	森 茂	ブンド主義との訣別
牧野勝彦	「反帝・労働者国家擁護」について	時評・	中ソ論争とスターリン主義の崩壊
広田 広	客観主義的ソ連論批判(1)	北川 登	戦後革命の敗北——戦後日本労働運動史(2)
北川 登	「労働者管理・国有化」のローガンについて	広田 広	現代世界とプロレタリア革命
<b>第3号 (1959年11月)</b>	品切	<b>第6号 (1962年5月)</b>	品切
野原 宏	労働運動の危機の打開のために	無署名	参議院選挙と革命的労働者の闘い
山田 朗	一步後退した人民公社——エセ共産主義社会論を粉碎せよ——	黒田寛一	新しい労働者党の創成のために
山本勝彦	日本共産党の思想統制をめぐって	倉川 篤	春闘と革命的労働者の立場
<b>第4号 (1961年9月)</b>	品切	森 茂	米ソ核実験反対・反戦闘争の前進
無署名	反帝・反スタの旗を高くかかげよ	時評・	核停会議とヨーロッパ核武装／憲法改悪と社共・構改派の墮落／第四インターの「提案」
無署名	反戦インターナショナルの創成へ	北川 登	戦後革命の敗北——戦後日本労働運動史(3)
田宮健二	革命的共産主義運動の現段階と革命的プロレタリア党創造の課題(1)		

広田 広 労働の質と量について

**第7号 (1963年5月) 品切**

黒田寛一・倉川篤・森 茂 政治局内多数派による革命的マルクス主義の歪曲に抗して断乎たる分派闘争を展開せよ!

I 「第三回全国委員総会路線」なるもの

武井健人 日本革命的共産主義運動の飛躍的前進のために

広田 広 山本の『党建設論』について

野島三郎 動力車の闘争について

II 地区の党建設をめぐる諸問題

森 茂 「三全総路線」と党内闘争について

山本勝彦 党組織の地区的確立と産業別労働者委員会

山本勝彦 党建設論——党建設における当面の理論的諸問題

朝倉隆介 労働者党建設の現在の問題点と課題

III 組織論をめぐる諸問題

関西地方委 組織活動のイロハの原則の無視について

九州地方委 同盟内思想闘争のイロハの原則の無視について

関西地方委 組織“混乱”止揚のために

関西地方委 九州地方委員会の意見書に反駁する

吉川文夫 (附・1) わが同盟の質的強化と前進のために

倉川・森・山本 (附・2) 最後の事実名古屋労働者細胞「政治局討議資料」に関するわれわれの見解

村山孝治 この期間の活動における諸問題と党内闘争によせて

坂内鉄雄 官僚主義的組織論批判

IV 理論闘争の核心的諸問題

山本勝彦 現段階における党内闘争の本質と目標

山本勝彦 労対指導の腐敗について

早大細胞 キューバ問題にかんする「前進」

編集局への意見書

早大細胞 北川論文へのわれわれの見解

山本勝彦 思想闘争の組織化と前進のために

森 茂 現時点における論争問題について

松本洋行 大衆運動主義的傾向について

山本勝彦 大衆運動主義の今日的形態

坂内鉄雄 教条主義者と修正主義者との平和共存路線批判

原 晶 深夜便反対闘争から何を学ぶか

国鉄委員会 動力車の闘争をめぐるブクロ官僚のジグザグ

国鉄委員会 わが同盟指導部の腐敗をのりこえ「陰謀的」分派闘争を推進せよ!

朝倉隆介 政治局内多数派路線批判

V 学生細胞建設をめぐる諸問題

朝倉文夫 学生戦線における同盟建設のために

西川理美 11・30統一行動の教訓

学生組織委 大衆運動主義からの訣別のために

断章——編集後記にかえて

**第8-9合併号 (1963年12月) 品切**

国鉄委員会 機関区統廃合反対 検修合理化反対の実力闘争を断固闘いぬこう!

無署名 ブクロ官僚派の現状とわが同盟の直面する問題点

山代冬樹 反代々木諸潮流の没落とその革命的止揚へのわれわれの闘い

林 健一 革マル派教育労働者委員会の建設のために

石田六郎 革命的組織論確立のために

**第10-11合併号 (1964年5月) 品切**

岩室 剣 春闘における革命的共産主義者の任務

多岐川敏雄 全通におけるブクロ派の破産と我々の組織的課題

本庄 武 動力車労働者の12月反合理化闘争の問題点

紅簾 巖・山岡鉄治 日韓会谈反対闘争の前進のために

ブクロ官僚の驚くべき変質

宮田剣一 スターリニスト革命戦略論批判(上)

山代冬樹 現代「ソ連論」論争の問題点(ノート)

森 茂 学生戦線における革マル派建設のために

学生組織委 学生戦線における革マル派建設の闘い

**第12-13合併号 (1965年2月) 品切**

石田六郎 日本階級闘争の現時点とわれわれの組織的課題

本庄 武 64年4・17スト敗北の教訓

山代冬樹 学生戦線の革命的統一のために

森 茂 中間三派の運動論的・革命的批判

宮田剣一 スターリニスト革命戦略論批判(下)

戸坂 恵 書評：芝田進午『現代の精神的労働』

**第14-15合併号 (1966年12月) 品切**

本庄 武 再編成下における日本労働運動の現状

無署名 ハンガリア革命と日本反スターリン主義運動

無署名 ブクロ=中核派の「反帝・反スタ」戦略論批判

塚原義雄 長船社研の墮落と破産について

滑川舜一 日本共産党の「自主独立」路線批判

石田六郎 ラーヤ理論のえせマルクス主義の本質

山形克己 梅本克己の今日的「発展」

伊南正健 早大学費・学館闘争の核心問題は何か?

倉沢傑然 日韓闘争の総括と教訓

**第16号 (1967年12月) 品切**

森川忠勝 ロシア革命と現代

滑川舜一 トロツキー永続革命論の今日的継承のために

年田 亘 一九〇五年・レーニン

海原 凜 プハーリン「過渡期経済論」の問題点

大武 孝 変節漢・津田道夫のなれの果て

河井真一 日教組10・26ストライキ総括

**第17-18合併号 (1968年3月) 品切**

無署名 羽田・佐世保闘争の教訓にふまえ、革命的反戦闘争、沖縄闘争のさらなる前進をかちとろう!

野原 拓 『共産党宣言』120周年にあたって

飯田立志 中国「文化大革命」の現段階

稲川 学 「羊頭狗肉」の階級形成論

森山伸夫 日本共産党の十年間の沈黙の「総決算」

滑川舜一 ダニエルズに依拠したトロツキーの文献解釈

小島正臣 日本反スターリン主義運動の初期の苦闘の今日的教訓

仁科郷介 「沖縄返還 国民大会」をめぐる闘いの報告

**第19-20合併号 (1969年8月) 品切**

無署名 4・28闘争における武装蜂起主義諸集団の破産とわが同盟のたたかひの革命的意義

中央学組委 安保闘争論の核心問題

沖縄人民の解放をめざした本土・沖縄の革命的たたかひ

国鉄委員会 国鉄五万人要員合理化攻撃とわが同盟のたたかひ

滑川舜一・鶴飼久志 チェコ問題の本質と反スターリン主義運動の前進

大宮尚男 日本共産党の労働運動論批判

前原茂雄 極左盲動集団プソ=ブク連合の「反帝」労働運動路線批判

平山捷一 ブクロ＝中核派の沖縄「本土復  
婦」闘争路線のマヤカン  
森山伸夫 榊利夫による「トロツキズム批  
判」の破産  
土門 肇 マルクス世界革命論

**第21-22合併号 (1970年7月) 品切**

無署名 日本階級闘争の危機と70年代に  
おけるわが同盟の任務  
早川志朗・速水出夫 日米新関係のもとで  
の安保・沖縄闘争  
沖縄マルクス主義者同盟 全軍労の基地合  
理化・首切り反対闘争  
河原清志 内部対立を深めるブクロ＝中核  
派の右転換とその根拠  
戸上武士 革労協「行動委員会運動」論批  
判  
前原茂雄 拠点なき“虚点”スト論  
小島正臣 一無教会派キリスト教徒の思い  
つきの「原点」  
海原 凜 変貌する宇野経済学

**第23-24合併号 (1971年3月) 450円**

前原茂雄 日本労働戦線の帝国主義的再編  
成を粉碎せよ  
米川紀夫 分解する総評と日本労働運動の  
危機  
中央学組委 学生戦線における70年闘争の  
総括と教訓  
<声明> ブクロ＝中核派による同志海老  
原俊夫虐殺を糾弾する。  
朝倉文夫 海老原虐殺問題と日本反スター  
リン主義運動  
今永一行 末期を示すブクロ＝中核派の  
「被抑圧民族への迎合」主義  
秋川 清 プント主義への吊鐘  
岩城 健 模索なき観念左翼の墓標——広  
松渉批判——

**第25号 (1971年7月) 450円**

<声明> 人民党＝日共による同志町田宗  
秀虐殺を糾弾する。

黒田寛一 安保＝沖縄闘争の教訓にふま  
え、人民党＝日共を組織的に解  
体せよ  
国鉄委員会 爆発した5・20国鉄ストライ  
キの教訓  
早川志朗 沖縄返還協定調印実力阻止にむ  
けたわが同盟の闘争戦術  
西方輝男 破産したブクロ＝中核派の「沖  
縄奪還」論への最後の批判  
田中三郎 マル学同組織建設のために  
前原茂雄 労働運動の帝国主義的再編成下  
でわれわれの闘いはいかにある  
べきか  
産土 萌 パリ・コミューンと現代  
岩城 健 破壊された原像——広松渉批判  
海原 凜 宇野「価値形態論」の批判

**第26号 (1971年12月) 470円**

中央学組委 激動する内外情勢とわが同盟  
の任務  
国鉄委員会 マル生粉砕闘争の前進のため  
に  
等々力亘 「ドル」支配の終焉と激化する  
帝国主義諸列強間の対立・抗争  
半沢 貫 「米中接近」で揺すぶられる現  
代世界と中共の二面政策の反プ  
ロレタリア性  
古城隆志 最後の民同・協会（向坂）派の  
「反合闘争論」批判  
岩谷文雄 「左翼」的解釈主義者の破綻—  
—富岡裕批判——  
海原 凜 宇野理論の戯画——降旗節雄批  
判——  
革マル派／沖縄マル同 琉大襲撃・町田虐  
殺問題と当面する反スターリン  
主義運動の任務  
朝倉文夫 日共＝人民党の組織的解体にむ  
け永続的闘いを  
仁科郷介 のりこえられた前衛による「革  
マル＝トロツキスト批判」の論  
理  
知識人戦線における闘い、

<付> 町田虐殺問題をめぐる動向

**第27号 (1972年2月) 450円**

無署名 凋落の一途をたどる既成左翼を  
のりこえ、日本階級闘争を革命  
的に牽引せよ  
革共同・革マル派 革マル恐怖症一殺人狂  
乱患者におちぶれたブクロ派を  
絶滅せよ  
殺人狂乱集団に転落したウジ虫・ブク  
ロ派せん滅の闘いの記録  
木曾淳士 ブクロ＝中核派の最後の解体の  
ために  
高橋幹雄 「主体と変革」派への吊辞  
朝倉文夫 ハンガリア革命十五周年に際し  
て  
岩城 健 国家論主義の陥穽  
ブクロ組織の腐敗の記録(1)  
・日本革命のため指導部の小ブル急進  
主義を弾劾する／竹中意見書  
・「革共同 全国委」(ブクロ派)第2回  
大会議案

**第28号 (1972年4月) 品切**

無署名 帝国主義的再編に抗して72春闘  
を革命的に闘いぬけ  
沖縄マル同 沖縄一反戦・反基地闘争をさ  
らに推進せよ  
国鉄委員会 国鉄労働運動の前進をかちと  
るために  
全通委員会 全通における反合・労組破壊  
攻撃粉砕闘争の諸教訓  
山中太郎 ブクロ＝中核派を最後のに解体  
せよ  
<声明> 連合赤軍による「あさま山荘」  
事件ならびに大量リンチ殺人事  
件について  
中央学組委 学生戦線における大衆運動＝  
同盟組織づくりの前進と党派闘  
争の勝利のために  
新城 薫 パリ・コミューン100周年をめぐ  
る左翼戦線の腐敗と代々木官僚

による「国家論」追求の現段階  
ブクロ組織の腐敗の記録(2)  
・革共同への疑問／小野田襄二  
・ウーマン・リブに吹きとばされたブ  
クロ「全学連第30回大会」議事録  
・内部通信「革命の砦」(創刊号～第  
6号)

**第29号 (1973年4月) 500円**

無署名 革マル派十年の闘いの教訓にふ  
まえ、73年階級闘争を革命的に  
牽引せよ  
中央学組委 日本階級闘争の現段階的特質  
とわが同盟の闘いの教訓  
古谷隆太 ベトナム「和平」の欺瞞性を暴  
露し、反戦・反基地闘争を断固  
おし進めよ  
中央学組委 ベトナム反戦闘争の教訓と党  
派闘争の飛躍的強化のために  
永山卓司 全軍労無期限ストの革命的教訓  
<声明> 11・8事件の否定的教訓にふま  
え革命的學生運動をさらに推進  
せよ  
古川一衛 露呈した日共の内部抗争  
小島正臣 戦闘的労働者への敵対に狂奔す  
る「国民の党」  
前原茂雄 組合運動への舞い戻りを策すブ  
クロ派労働運動論の大破綻  
古川一衛 偽造と没理論で書きなぐったバ  
カの標本  
今永一行 毛沢東主義に浸透された「永続  
革命論」——第四インター批判  
土門 肇 日中国交回復と周恩来外交

**第30号 (1973年8月) 500円**

黒田寛一 革マル派結成十周年に際して  
朝倉文夫 反スターリン主義運動の歴史的  
教訓にふまえ、さらに前進せよ  
木曾淳士 革命的な反戦闘争の否定にまでゆ  
きつたブクロ派の変質の現段  
階  
牧原光良 スターリニスト以下の民族解放

闘争論  
 高岡基雄 帝国主義の政治力学論  
 市井直司 レーニン革命論のプランキズム的改ざん  
 岩谷文雄 スターリン・吳璉式過渡期社会論への転落  
 米川紀夫・川崎鉄造 爆発した73春闘とその教訓  
 全通委員会 全通5～6月闘争の総括と当面するわれわれの任務  
 古川一衛 70年型小ブル雑派の終末  
 新城 薫 ブルジョア民主主義の擁護者に転落した「人民民主主義」者

第31号 (1973年12月) 500円

山代冬樹 党派闘争をさらに推し進めよー70年型小ブル雑派の最期を誇らかに宣言し、死の痙攣をたて  
 <声明> 血をすすった狂乱集団・青虫＝解放派を、ウジ虫＝中核派もろとも根絶せよ！  
 革マル派／他 血ぬられた手を覆いかくそうとする解放派の最後のあがきを断て  
 磯田八郎 鉄面皮な居直りをきめこむ狂乱的虐殺者集団・解放派をすみやかに解体せよ  
 清 一彦 英雄的に闘いぬいた全学連の諸君へ——虐殺された金築・清水両君をしのいで  
 小島正臣 死に急ぐブクロ＝中核派の最期の根絶をちとれ  
 今賀千安 武装蜂起主義からのなしくずしの転換を粉碎せよ  
 大橋五郎 「反革マル」盲動に身を託すルンプロ青虫を根絶せよ  
 古谷隆太 日本の四トロの綱領の分裂  
 篠山史夫 瓦解したブント残党の今日  
 日録・小ブル雑派根絶の闘いの記録  
 ブクロ派の構造的崩壊を示す内部文書  
 [資料と解説]  
 丹下昭夫 中国核実験反対へ転換した日共

の政治主義の本質を暴露せよ  
 森山仲夫 理論的錯乱と衰退の標本——上田耕一郎「一国革命と世界革命」論文について  
 青田 弘 平和友好祭を破壊した“最後の民同”＝向坂派の反革マル派策動を一掃せよ  
 神吉秋一 協会＝向坂派による“革マル派批判”の本質  
 中央学組委 反戦・反基地闘争を革命的に牽引せよ  
 半沢 貫 毛のカリスマ的権威をかりた周体制確立の第一歩——中共十全大会周恩来報告をめぐって  
 土門 肇 現代における国家と革命—小選挙区制反対闘争の前進のために

第32号 (1974年4月) 500円

無署名 わが同盟は反革命殺し屋集団との党派闘争の勝利を宣言する  
 山川晴夫 白旗をかかげ潰走しはじめた反革命集団・ブクロ派に断を下せわが党派闘争からの全面逃亡を開始した反革命集団残党を容赦なく葬り去れ  
 仙波 彊 反革命的殺人鬼・放火魔集団になりはてたブクロ派をすみやかに葬送せよ  
 古川一衛 逃げまどう反革命殺人屋集団を容赦なく葬りされ——戦争ごっここの果てに狂い死にするウジ虫一族  
 前原茂雄 革命的労働者の底力を発揮し、74年春季闘争の戦闘的爆発をちとれ——ブクロ派の「二本足」方式によるのりきりの願望を粉碎せよ！  
 木曾淳士 すりかえと偽造に狂奔する力なき暴力礼讃主義者の破産  
 瀬山尚忠 反革命殺人鬼集団に手をさしのべる腐敗した「文化人」を糾弾せよ

滑川舜一 崩壊寸前のブクロ派組織  
 多田文男 ウジ虫軍団の荒廃  
 豊島清治 <処刑の喜び>を煽る清水丈夫  
 田中三郎 殺りくの煽動者＝本多延嘉  
 <声明> 反革命集団・ブクロ派による<殺人・火つけ>を糾弾する！  
 1 ブクロ＝中核派による同志吉川虐殺に対し、反革命集団粉碎の断固たる党派闘争をもって応えよ！（1月7日）  
 2 黒田議長宅に放火した反革命殺人・火つけ集団ブクロ派を日本左翼戦線から叩き出せ（1月19日）  
 3 矢崎、四宮、富山三君の虐殺を糾弾する！——権力に操られた反革命殺し屋集団＝ブクロ派を全戦線から一掃せよ  
 4 ブクロ派による琉大生比嘉君虐殺糾弾！——怒りをこめて殺し屋徒党を地上から完全に放逐せよ（2月10日、沖縄県委員会）  
 荒廃を極める末期のブクロ派 [資料・I]  
 1 殺人を絶叫する北小路敏(12・15集会基調報告／ほか)  
 2 “目をえぐり皮をはぎ股ぎきの刑に……”——(広島ウジ虫ビラ)  
 3 “殺って殺って殺りまくれ！”——1・24殺人を謳歌(ビラ)  
 4 「70年代革命の正否をかけた内乱的死闘に勝利せよ」(『革命の砦』第40号)  
 5 「1・24を上回る快挙」——<2・8沖繩>(中核派ビラ)  
 6 「政治局 本多一派の対カクマル完全せん滅戦からの逃亡を粉碎せよ」——<中核赤軍>結成準備会  
 7 「反革命 差別者集団カクマルをせん滅せよ」——全国部落研・戦闘同志会  
 殺人・火つけ集団中核派の1・24三学友虐殺問題についてすべての知識人、

労働者、学生諸氏に訴える[資料・II]  
 早稲田大学新聞会

第33号 (1974年4月) 450円

中央労組委 国民主義的歪曲を許さず74春闘を戦闘的に牽引せよ  
 等々力亘 <石油危機>を引き金として没落をはやめる世界帝国主義  
 多岐川敏雄 スト権奪還闘争の爆発をちとれ  
 国鉄委員会 動労札幌問題と革命的労働者の闘い  
 青田 弘 組織的死に追いつめられた解放派の醜悪な<遺言>  
 河原清志 ブクロ派の「日帝の朝鮮侵略」論のスターリニストの本質  
 牧原光良 議会改良主義的腐敗をのぼりつめた日共第12回大会  
 杉村 稔 チリ人民連合崩壊と左翼思想の混迷  
 柴山昌郎 破綻した構改派式「世界革命論」

第34号 (1974年7月) 650円

政治組織局 ブクロ派解体の党派闘争の勝利宣言  
 政治組織局 ブクロ＝中核派に無条件降伏を勧告する  
 政治組織局 デマ通信印刷拠点を粉碎  
 美津野大雪 ブクロ派解体の闘いの最後を飾った法政大闘争  
 古川一衛 空中分解前夜のブクロ・ウジ虫関西地方委 <声明>ブクロ派による小野正裕君虐殺を糾弾し末期の反革命集団を掃討しつくせ  
 政治組織局 社青同解放派の最高指導部・軍団を最終的に解体  
 堀田高久 解放派への葬送の辞  
 高浜 覚 74春闘の教訓  
 山代冬樹 党派闘争の勝利の地平と政治経済闘争の推進のために  
 貫井信夫 参議院選と革命的労働者の任務  
 多岐川敏雄 没落する日本型社民の新たな

今賀千安 分解  
組織建設とは無縁な官僚の幻想  
——「吉川文書の暴露」なるもの  
の内実  
豊島清治 権力に泣訴する本多延嘉  
安原重代 惨澹たる獄中ウジ虫  
星谷伸一 狂乱化したブクロとりまき「知識」人  
河原清志 殺人鬼と接吻した老デマゴグ  
岩尾 透・北山哲人 「内ゲバ批難」の迷妄  
労働者にとっての〈5・13〉  
半沢 貫 周体制のもとでの「階級闘争」  
高岡基雄 『帝国主義論』の民族主義的改ざん  
君塚俊平 管理資本主義論への転落

**第35号 (1974年12月) 700円**

高浜 覚 警察権力とブクロ派とが結託した組織破壊攻撃を粉碎し、わが反スターリン主義運動の新たな飛躍をかちとるために  
政治組織局 国家権力の謀殺を糾弾する  
政治組織局 中核派を偽装した警察権力の襲撃を糾弾する  
全通委員会 権力による同志山崎洋一の虐殺を糾弾する  
全通委員会 追悼——同志山崎洋一  
学生組織委 党派闘争の勝利  
美津野大雪 警察とブクロ派を震撼させた  
10・15の闘い  
山中太郎 警察のあらたな襲撃  
〈付〉馬脚をあらわしたスパイ・ボンタ  
政治組織局 ウジ虫本丸の陥落  
氏家 清 爆砕されたブクロ派集會  
〈付〉ウジ虫兵士に告ぐ！  
古川一衛 直ちに権力の走狗と袂を分けて  
前川 健 改めて問われる随伴「知識人」の責任  
瀬山尚忠 無思想なブクロ派の提灯もち  
高鷲七郎 反戦闘争の新たな高揚を  
早川志朗 日本核武装化阻止の闘いのため

に  
米川茂雄 揺らぐ日本帝国主義と労働者階級の当面する闘い  
三好剛治 刑法改悪阻止闘争の前進のために  
大道正也 狭山差別裁判闘争の勝利にむけて  
半沢 貫 中共指導部の右旋回  
速水出夫 荒廃した日本トロツキスト  
小泉伸一 揺らぐ現代帝国主義

**第36号 (1975年3月) 800円**

中央労組委 75春闘を牽引せよ  
国鉄委員会 挫折した国鉄スト  
石川紀久 「B変仕業」をめぐる闘いの経過と教訓  
全通委員会 全通74秋年闘争とその教訓  
教育労働者委 日教組運動の右翼的歪曲に抗して  
和泉 朗 日共式「教師＝聖職」論批判  
瀬山尚忠・土橋満男 スパイを自認したボンタ  
早川志朗 崩壊した「戦略的総反攻」  
黒部五郎 絶体絶命の右翼ゴロツキ集団  
土門 肇 ブクロ派解体闘争の歴史的意義  
今永一行 第三次謀略の本質  
堀田高久 瓦解した権力の謀略  
仙波 彊 謀略の隠蔽にのりだした敗残ウジ虫  
古川一衛 分解寸前の現代版黒百人組  
堀田高久 組織分裂の危機に瀕する青ムシ  
等々力巨 現代帝国主義のたそがれ  
河原清志 米韓共同声明と危機にあえぐ韓国  
半沢 貫 毛沢東なき周恩来体制の確立  
関原 勲 学習ノート・日本反スターリン主義運動の組織論(上)  
〈声明〉 大阪府警による松浦同志謀殺を糾弾する  
松浦 博 部落解放運動の前進のために

**第37号 (1975年5月) 900円**

梅津 敏 「産別戦争」の反革命性  
多岐川敏雄 「無制限・無差別産別戦争」の実態  
中央労組委 〈四位一体〉の労働者襲撃  
国鉄委員会 春闘破壊策動を打ち砕け  
〈附〉 勤労東京地本 反動の手先・労働者階級の敵になり下った中核派に対する糾弾声明(無断転載)  
自治労委 女性身障者への襲撃を弾劾する  
久方達夫・河野音平 現代の黒百人組の正体  
無署名 同志難波力の虐殺を弾劾する  
松本 亨 追悼——同志難波力  
難波同志夫人 彼の実践とまなざしを私の鏡として  
全通委員会 革命的全通労働者の虐殺を糾弾する  
自治労委 西田はるみ虐殺の意味するもの  
全学連・マル学同・革共同 同志船崎新の殺害を弾劾する  
政治組織局 現代の黒百人組の終焉——殺戮の最高責任者本多延嘉に鉄槌  
山代冬樹 本多延嘉＝ブクロ派への弔辞  
土門 肇 政治屋集団の最期  
高浜 覚 怒りもあらたに  
柿沼 徹 痛苦と希望にみちた袂別——中核派としての私の自己批判  
新たな決意と展望のもとに  
牧原光良 構改派の「内ゲバ」批難  
早川志朗 「殺し合い戦争」なる悪宣伝  
石洲九郎 撃ち倒された謀略隊員・その後  
資料・ブクロ派指導部の荒廃——本多延嘉の自筆メモ その他  
酒田誠一 梅本主体性論の変貌  
関原 勲 日本反スターリン主義運動の組織論(下)  
無署名 国家権力の走狗への葬送の辞

**第38号 (1975年8月) 900円**

革共同・革マル派 現段階における党派闘争について——左翼知識人の「提言」にかんするわれわれの

態度——  
無署名 黒三角同盟による謀略決戦をうちくだけ  
今 克敏 「反ファシズム解放戦争」なるもの  
古川一衛 敗走する殺人狂集団  
山川晴夫 「労働者」ウジ虫一掃のために  
堀田高久 国家権力の手兵・青虫中原一派の反革命的敵対  
〈資料〉 急速に分解する青虫一族——スパイ中原による「教祖」滝口批判  
政治組織局 すべての左翼、知識人は権力の謀略粉碎のために起て  
関西地方委 開始された第五次謀略  
追悼——同志碓井規義・藤井陽一・米田真章  
全通委員会 同志藤盛広之の虐殺を弾劾する  
たくらまれる第二の松川事件(「何者かによる計画的犯行」国鉄動力車労組新潟地方本部——無断転載)  
土門 肇／秦 豊 インタビュー・党派闘争の現段階と展望  
前川 健／栗原 玲児 インタビュー・「報復の論理」と党派闘争の原則  
ブクロ版「杉並選挙」粉碎の闘い  
もえあがる法政大解放闘争  
追悼 同志服部多々夫 同志鈴木和弘  
同志竹原 寿  
狩野弘史 党派闘争の勝利の地平にたち、反戦反安保闘争を断固として闘い抜け  
多岐川敏雄 75春闘——その敗北の教訓  
酒井 章 民同富塚の反階級的役割  
平野良彦 三木内閣の落日  
柴山昌郎 「政党支持自由」論の欺瞞性  
三好剛治 「爆弾テロル」の反階級性——「東アジア反日武装戦線」のなげかけた諸問題について  
夏樹繁治 斜視の政治論の大破綻  
黒部五郎 レーニン主義とテロリズム  
黒部五郎 レーニン主義と〈党ソヴェト

一武装蜂起>

初音幸彦 本多延嘉の最後——プロロ＝中核派の転落と変質の十三年・序章——

第39号 (1975年10月) 700円

<声明> 自爆したプロロ＝中核派  
無署名 現代の黒百人組を解散せよ  
池辺 清 すべての残存下部同盟員は即刻プロロ派を離脱せよ  
水島八郎 組織内の内戦を深めるプロロ官僚一派  
酒田誠一 暴力礼讃主義の亡霊のタワ言  
7・17新橋大謀略事件の真相  
沢上洋二 追悼 同志甲斐栄一郎  
塚谷武雄 権力意志の代弁の書  
半沢 貫 “覇権主義”に反対する周恩来中国  
鎌田敏勝 カマトンカチの悲鳴  
山田鉄生 “爆弾教祖”への転落  
米川紀夫 転機に立つ日本労働運動  
初音幸彦 スパイ組織の相続人・野島三郎  
無署名 同盟内思想闘争の意義と本質  
同盟第八回大会基調報告  
朝倉文夫 思想闘争の貴重な教訓をバネとして

第40号 (1975年11月) 1000円

土門 肇 殺しと爆弾の中核派を最後に絶滅するために  
美津野大雪 左翼知識人戦線の革命的構築のために  
今 克敏 構改派・春日グループの逡巡  
時田憲吉 後退した「第二の提言」  
自治体労働者有志 “斜視”から直視へ  
多田文男 おなかの中の行動左翼主義からの訣別を  
山田道夫 自立の泥沼に溺死した吉本隆明  
如月慎吾 「爆弾闘士」の墓碑銘を求めろ  
シミタケ  
宗像雅洋 残骸と化した浅田光輝  
姥捨 清 日本赤軍に見棄てられた「赤軍

派議長」

寺前 昇 自爆を唆かす挑発者  
石森俊造 自爆を甲う破戒僧  
千早振蔵 「殺しと爆弾」の中核派に死を！  
平野良彦 レッドパーズの新しい形態  
村屋善悟 頻発する列車妨害事件  
初音幸彦 本多延嘉・その虚像と実像——プロロ＝中核派の変質と転落の十三年・その1  
豊島清治 ロボット人間集団の自爆  
南今日子 殺しの中核派への絶望——元中核派女性メンバーからの手紙  
国学院大学文連幹事会 田中玲彦君虐殺を弾劾する  
猪狩 辰 反戦闘争の爆発を  
水田兵衛 朝鮮半島の危機とその歴史的根拠  
早川志朗 プロロ派の「後進国・半植体制」論  
無署名 「日帝の朝鮮侵略」論の大破産  
酒田誠一 平和移行論者の夢と冒険  
新城 薫 「歴史的妥協」の道をえらんだイタリア共産党

第41号 (1976年2月) 1100円

政治組織局 白旗をかかげたプロロ官僚  
<附> 瓦解した権力の謀略体制  
速水出夫 反スターリン主義運動の飛躍をきり拓け  
猪狩 辰 断末魔のテロリスト  
野田源太・豊島清治 暴露された爆弾盲動隠蔽の策動  
山川晴夫・海野不二夫 第二『週刊新潮』と化した「前進」  
土橋満男 反スターリン主義運動の「負の遺産」——山村克とその歴史の偽造について  
豊島清治 荒唐した「中核精神」の内側  
舞田元司 「朝鮮侵略略砕闘争」論の破産  
多田文男 政治的な、あまりに政治的な——春日グループの「提案」について

瀬山尚忠 混沌の中の胎動——6・27提言をめぐる左翼知識人戦線の流動  
芦村 毅 講座派以下の天皇制論  
追悼——同志秋本雅治 同志梅田順彦 同志関谷隆

<声明> 殺人・野盗集団から革命的左翼を組織防衛するための10・27の闘いについて

仙波 彊・池辺 清・野田源太 反革命的「戦争」体制の瓦解  
“爆弾と殺しと盗みの中核派”の全貌  
1 あばきだされた権力との密通の物証  
2 驚くべき電話盗聴と政治ドロの実態  
3 窃盗集団に転落した求殺隊  
4 市中銀行を狙うプロロ版「M作戦」  
5 「トラック部隊」による恐喝・横領・詐欺  
断末魔にのたうつ国家権力の走狗  
1 解体した中央武装勢力  
2 警察肝入りの「産別戦争」  
3 なりふり構わぬ真っ赤な大嘘  
あらわとなった関西ウジ虫の末期症状  
1 権力に泳がされた野放図な電話盗聴  
2 ふたたび摘発された調査拠点  
3 粛清・リンチで自己崩壊する組織  
4 「スパイ」捏造による自己保身

第42号 (1976年4月) 1100円

無署名 4月決戦ゼネストをたたかいぬこう  
中央労組委 76春闘を左翼的に牽引せよ  
無署名 末期のスパイ集団を解体せよ  
美津野大雪 「戦争敗北」を宣言したプロロ＝中核派  
<声明> スパイ集団＝解放派による3・19総評青年協集会破壊を弾劾する  
中央労組委 階級闘争の質的転換を闘いを牽引したわが同盟の指針  
その1 条件つきスト権回復要求をのりこえて闘おう  
その2 11・26から無期限ストライキ

へ！

その3 スト権の無条件全面奪還を  
その4 三木・自民党政府を打倒せよ  
その5 スト権奪還闘争の挫折をかみしめ労働運動の新たな飛躍を  
かちとれ

政府打倒へ！  
ルポ 200時間の政治スト  
座談会 “革マル派の時代”を革命の時代へ！

永井道範 民同型労働運動の墓碑銘——太田薫著『春闘の終焉』の示すもの  
小泉伸一 ロッキード事件と現代帝国主義の危機 その1  
初音幸彦 本多延嘉の遺産とその崩壊——3・14一周年に際して  
早川志朗 現実ばなれした世界情勢論  
姥捨 清 難破したウジ虫救済の舟——立花隆著『中核 VS 革マル』の反動性  
南大寺裕 「対カクマル戦争」体験記  
柿沼 徹 反革命調査活動の実態

第43号 (1976年6月) 1000円

無署名 プロロ＝中核派解体闘争における偉大な勝利  
無署名 プロロ官僚の降伏宣言  
美津野大雪 殺し集団の葬儀屋どもの喧騒  
舞田元司 狂言まわしを買って出た悪質ジャーナリズム  
新城 薫 羽仁五郎の鉄面皮な「遺言」  
瀬山尚忠 転向者集団に純化したプロロ派  
中央労組委 敗北した76春闘の教訓  
四方津啓 プロロ式「労働運動」の最期  
堀田高久 御用雑文屋アキロのエセ経済学について  
小泉伸一 戦後日本支配体制の終焉——ロッキード事件と現代帝国主義の危機 その2  
安原 純 ついに謀略を自認した権力  
沖 西人 末期のプロロ官僚のただれた二重生活

堀田高久 自滅の道を歩む解放派  
〈付〉 3・19動労襲撃はこのように  
準備された！  
半沢 貫 鄧小平失脚——その背景と意義  
向井行三 ソ連共産党第25回大会のしめし  
たもの  
仙波 疆 露呈した“クレムリン離れ”  
中原和己 詩「一九七五年十二月十四日」

第44号 (1976年8月) 900円

芦村 毅 ロッキード反戦闘争の推進のため  
貫井信夫 ロッキード事件と進む労働戦線  
の再編策動  
小泉伸一 アメリカ帝国主義の世界支配戦  
略  
河原清志 北京官僚の意を体した山川暁夫  
宮原高男 リヴァイアサンの尾  
竹林梅松 第六次謀略——その背景と本質  
国鉄委員会 謀略——国鉄労働者の闘い  
長本秀雄 北海道における鉄道謀略——そ  
の実態と闘いの教訓  
鎌田敏勝 右翼と中核派の一体性  
美津野大雪 権力・右翼とブクロ派の癒着  
久山郁夫 バクダン挑発者——高木正幸  
秋川 清 ブント主義の終焉  
池島直志 反スターリン主義とは無縁なブ  
クロ派  
如月慎吾 朝鮮侵略戦争妄想患者の寝言  
松永 一 転機にたつ部落解放運動  
津山純一 日共路線のあらたな変質  
牧原光良 組織的荒廃すすむ日共

第45号 (1976年10月) 1100円

内村朋明 プロレタリア階級独裁の放棄  
柴山昌郎 ブルジョアの自由への跪拜  
佐伯 念 宗教への讃歌！  
中央学組委 ロッキード反戦闘争の理論的  
教訓  
野々村忠躬 激化する米中ソの軍事的角逐  
久山郁夫 中豪—米豪会談の意味するもの  
阿久根健 転機にたつ韓国の民主化運動

近江磯雄 “現実主義の勝利”を謳歌する  
イタリア共産党  
水木章子 破産の自己合理化——第四イン  
ター第8回大会批判  
平野良彦 右翼的再編の荒波——現段階に  
おける労働戦線の右翼的再編  
キセンバルに燃えた闘いの記録  
殺人演習を弾劾する(沖縄県委員会)実  
弾演習阻止行動に参加して(一労働者)  
たとえ砲弾で肉体が引き裂かれようと  
も(大城重吉)

山川晴夫 断末魔のスパイ集団  
如月慎吾 ブント主義者清水の泣き言  
久山郁夫 ブクロ派と角栄・清玄との一体  
性  
磯田八郎 破産の隠蔽に大わらわの侵略戦  
争妄想患者  
タナカ家の人々  
竜岡光男 戦争気狂い集団が掲げた白旗  
南海栄三 最大限綱領主義者の悲鳴  
花岡 実 ウジ虫「総路線」の総破産  
舞田元司 ポロポロ帝国主義論のポロかく  
し  
大木戸勉 鉄道謀略の隠蔽をかってでたブ  
クロ派  
第六次謀略の全貌

第46号 (1976年12月) 1100円

岩上哲男 ハンガリア革命と日本反スター  
リン主義運動  
杉原 徹 ブクロ官僚一派の歴史的変質  
大竹秀芳 ハンガリア革命の教訓の破壊  
山田鉄生 ノン・スタ左翼アンダーソンの  
謬点  
大沢壮一 ハンガリア革命をめぐる日本左  
翼理論戦線  
春山哲夫 思想家・武谷三男の死  
無署名 ブクロ派の第二敗北宣言  
南 幸一 瓦礫と化したスパイ集団  
木村浩志 時代錯誤の帝国主義戦争論  
河原清志 戦争妄想患者の死斑  
芦村 毅 戦犯天皇制の美化

大野道夫 崩壊する解放派集団  
〈付〉 9・8教育労働者誤爆の真相  
スパイ集団・解放派の正体  
中央学組委 ロッキード反戦闘争の現段階  
長浜精一 変貌する非同盟主義  
河原清志 アメリカ帝国主義の挑発  
向井行三 ミグ25事件の意味するもの  
半沢 貫 毛沢東主義の破産——毛沢東の  
死に際して／「北京政変」——  
その現実と本質  
上宮達夫 陽性修正主義の道をひた走る日  
共  
石森俊造 リンチ・ホモ・カネ・宮頭  
毛利晴信 景気の子屋になった竹中明夫  
岩谷文雄 若きマルクスとエンゲルスの共  
産主義論

第47号 (1977年2月) 1100円

植木四五郎 この悲劇を革命へ！  
大島秀子 ハンガリア革命の背景  
春山哲夫 日本革命的共産主義運動の創成  
後藤 始 壇谷雄高の光と闇  
藤村明子 井上光晴のかげ  
佐藤裕司 ブクロ官僚のハンガリア論  
酒田誠一 ネオ・スターリニズムの誕生  
高隅淳一 マルクス主義を爆破した不破  
遊部 一 「先進的民主主義・社会主義」  
の政治経済学的粉飾  
修正資本主義へのいざない  
米川紀夫 非リアリスティックな平野謙  
林田孝志 現代版黒百人組の系譜  
豊福一造 テロ挑発者の正体  
山住 広 四トロ官僚の迷妄  
芦村 毅 危機に立つアメリカ帝国主義と  
波多野玄 カーターの勝利  
佐伯 念 緊迫する南部アフリカ情勢  
阿久根健 タイのクーデタ  
吉本龍司 自衛隊の強化と日本経済の軍事  
化  
無署名 権力の走狗を絶滅せよ  
九州ブクロ派の最期  
大野道夫 帝国主義戦争の形態変化

如月慎吾 清水文夫の完敗宣言  
彦根三郎 破産した「総路線闘争」  
今 克敏 ブクロ派の第三敗北宣言

第48号 (1977年4月) 1300円

中央学組委 77春闘の爆発をかちとれ  
平野良彦 右翼再編に抗して  
岡倉岩男 裏切られた全通9月反合闘争  
森下信一 全通戦線における〈四位一体的  
攻撃〉粉碎の闘い  
全通委員会 全通組織建設上の一つの教訓  
島崎健蔵 美濃部都政に屈服する日本共産  
党  
折谷 猛 日教組主任制反対闘争の敗北と  
わが同盟の闘い  
長谷川俊雄 76年の国鉄労働者の闘い  
国鉄委員会 鉄道謀略との闘い——1976年  
国鉄委員会 貨物削減・合理化反対闘争の  
推進のために  
酒井 章 負け犬の世迷い言  
酒田誠一 丸山真男——高級なるマキャベ  
リズム  
水木章子 日共脱落分子の気楽な転身  
松野葉子 高知聡の転向——その不徹底性  
東野 直 西京司の末路  
木月健一 実存探求の挫折——鈴木亨のば  
あい  
向井行三 西ドイツ原発反対運動の高揚と  
米・中・ソの核開発競争  
奥野広史 暴きだされたLNG疑獄  
小泉伸一 “日韓癒着”暴露の意味するも  
の  
高鷲七郎 反スターリン主義運動の大道を  
きりひらけ  
長門伴蔵 ブクロ官僚の断末魔  
安達太良 敗北下の「先制的内戦戦略」  
〈声明〉 権力による同志水本潔謀殺・遺  
体すりかえを弾劾する  
〈声明〉 12・5謀略襲撃の重大な真相と  
証拠を発表する  
初音幸彦 スパイ集団＝ブクロ派の最期  
〈声明〉 スパイ集団解放派は即刻組織を



解散せよ  
青野浩二 「産別戦闘」を絶叫するスパイ  
=中原一派  
〈資料〉 中原一派と労対派との分裂  
と抗争

第49号 (1977年6月) 1300円

〈声明〉 権力による焼殺謀略弾劾  
4・15謀略の真相をあばく  
幸田 護 地獄に堕ちた解放派  
無署名 同志金子成夫の謀殺を弾劾する  
小泉伸一 追悼——宇野弘蔵  
毛利晴信 宇野弘蔵のスターリン批判  
片桐 悠 渡辺寛のスターリン批判の批判  
高岡雄雄 鎌倉孝夫のスターリニストの本質  
久山郁夫 プント主義——その汚濁と出生の秘密  
木月健一 実存探求の挫折——鈴木亨のばあい・つづき  
半沢 貫 鄧小平再復活をめぐる  
安原 純 フランス版毛従主義者の動揺と分解  
牧原光良 日共の変質——この一年  
大隅 徹 現代世界の激動をどうとらえるべきか  
竹朋恭二 国家独占資本主義下の地方自治へのかぎりなき幻想  
並木 真 77春闘の前進のために  
中央労組委 「ストなし春闘」に抗した革命的労働者の闘い  
北野大吾 カーターに引導を渡された福田「拳党協」内閣  
三好剛治 アメリカ帝国主義による世界支配の再編成  
降戸新生 原子力開発の反人民性  
金剛岳三 決裂した日ソ漁業交渉  
阿久根健 危機に瀕する韓国朴政権  
無署名 スパイ集団・青解派への弔辞  
田堀甚吾 完勝の地平にたつて  
山代冬樹 スパイ・清水の混乱と破綻  
村中正毅 立証された権力の謀略

第50号 (1977年8月) 1400円

沖縄県委 核基地=沖縄におけるわが革命的左翼の闘争  
北里 讓 日韓一反戦闘争の推進のために  
稲取 力 進展する東アジア核軍事体制の強化  
三好剛治 あばきだされた日韓ゆ着の実態と構造  
葉室真郷 ポピュリズムの具に転落した日共  
久山郁夫 「朝鮮侵略戦争前夜」論の末路  
無署名 「三里塚決戦」——四者合意の茶番劇  
麦野紀夫 「むつ」母港化阻止闘争の現段階  
降戸新生 原子力発電所建設阻止闘争の前進のために  
香川明男 4・15焼殺謀略を弾劾する  
初音幸彦 第七次謀略——その特徴と背景  
全学連現地調査団 あらわとなった5・13謀略  
堀田高久 自滅する解放派  
大野道夫 瓦解する青ムシ集団  
渡瀬 大 法廷でも実証——水本君謀殺・遺体すりかえ事件  
教育労働者委 教育労働戦線におけるウジ虫解体の闘い  
速水出夫 最期を迎えたブクロ官僚の内部抗争  
瀬山尚忠 走狗=殺し屋集団の組織的惨状  
南今日子 共同保育に大わらわの走狗集団  
荒木真三 政治的動物どもの末路  
重田 健 ブクロ派手配師の頹落  
高浜 寛 「戦略的防衛」を宣言したスパイ清水丈夫  
鬼塚龍三 敗戦処理内閣首班・野島三郎の末路  
山辺 進 高橋和巳の陥穽  
横地 直 大脳皮質の欠損  
酒田誠一 スターリニズムの新たな内部分解

波多野玄 帝国主義的争闘の激化

第51号 (1977年11月) 1400円

阿蘇平八 ロシア革命と現代  
矢吹乙吉 初期レーニンの革命理論  
大崎慎三 トロツキーの自己弁護  
天道公平 レーニン『帝国主義論』——その特徴と問題点  
北里 讓 現実肯定主義への転落  
坊島 悟 東欧人民民主主義革命の影  
酒田誠一 ユーロ・コミュニズムはどこへ行く？  
今 克敏 最後の追いつめられたスパイ集団を一掃せよ  
〈声明〉 同志矢萩信久の謀略的殺害を弾劾する  
鬼塚龍三 全敗下の殺し屋集団  
水沢 徹 崩壊の淵にあえぐスパイ=青虫  
東山二郎 第七次謀略——東海地方におけるその特質  
北海道地方国鉄委 北海道における鉄道謀略  
全社会に暴かれた現代の謀略  
知識人戦線での謀略弾劾の闘いをさらにおし広げよう  
ルポ・ついに実現された知識人の決起  
ジャーナリストも決起  
暴かれた遺体すりかえ  
万事休す権力の走狗  
山住 広 〈謀略〉に沈黙するジャーナリスト  
長井 忍 謀略の背後で暗躍する〈地下人脈〉の実態  
加藤 徹 北方諸島支配反対の闘いを革命的に推進せよ  
石川 護 本格化した海洋の国家的分割  
鎌田敏勝 クレムリン官僚の代弁者  
久山郁夫 戦争妄想患者の幼児的反撓  
瀬山尚忠 馬脚をあらわした三里塚「四者合意」  
中央学組委 全学連第41回大会の理論的諸教訓

第52号 (1978年1月) 1400円

岡崎直毅 一九五五年体制の崩壊と政治支配体制の再編成  
萩原 満 揺らぐ代々木共産党  
五領 進 中国派の反ソ・ナショナリズム批判  
西銘大吉 加速する右翼的労働戦線統一  
中央労組委 総評第55回大会の意味するもの  
菊池 薫 賃金論のために  
半沢 貫 崩壊した毛沢東神話  
斑鳩高志 変質を深めるブレジネフ体制  
高村淳一 ソ連新憲法草案の意味するもの  
高村淳一 核武装を宣言したフランス共産党  
久住文雄 パンス訪中の意味するもの  
山河広海 原子力技術の「自主的・民主的開発」の虚妄性  
吉本龍司 帝国主義にかんする〈無知と無恥〉の集大成 その1  
宮原高男 ブクロ派のロッキード論の崩壊  
自治体労働者委 自治労働戦線における勝利した走狗集団一掃の闘い  
沢村和夫 高まる謀略弾劾の闘いに悲鳴をあげるブクロ官僚  
〈声明〉 国家権力による同志小池茂の虐殺を弾劾する  
奥野広史/木村浩志 9・14報復謀略の真相  
全社会的に燃えあがった水本君謀殺弾劾の闘い  
磯田八郎 正体の知れわたったブクロ官僚の悪あがき  
第53号 (1978年3月) 1400円  
唐馬 剛 革命はいかに篡奪されたか？  
(上)  
大山慎一 動揺し分解する宮本=不破体制  
牧原光良 分裂を公然化した日共第14回大会  
柴山昌郎 ブルジョア政治学者の反乱

柳井春雄 謀略粉碎の闘いに敵対する日共中央  
飯沼隆一 工場閉鎖・全員解雇粉碎闘争の裏切り  
飛鳥 翔 出版資本に奉仕する日共  
葉室真郷 「学び成長する 要求」運動論の破碎  
谷田三夫 全人民に包囲された権力の走狗  
如月慎吾 謀略弾劾闘争の大衆的展開のために  
内野文久 知識人戦線における水本事件の波紋  
奥野広史 日共式人権擁護論の虚偽性  
百瀬 忍 知識人の決起に恐怖する中核派  
鬼塚龍三 権力と心中するブクロ派  
後藤久三 走狗集団の死のケイレン  
東岩仁志男 三里塚で露呈した走狗集団の正体  
吉本龍司 帝国主義にかんする<無知と無恥>の集大成 その2 黒田理論への屈服(上)  
東 慎二 4・15謀略追認の業におののく青ムシ  
沖縄県委 摘発された自衛隊の諜報と謀略  
酒田誠一 崩壊寸前のフランス左翼連合  
降戸新生 原発阻止闘争の前進のために  
中央学組委 反戦-原発反対闘争の理論的教訓  
沢渡 遙 学費・公共料金値上げと日本帝国主義の経済危機

第54号 (1978年5月) 1200円

松代秀樹 円高-ドル安に露呈した日米帝国主義の争闘  
岩谷文雄 宇野学派の「自主管理」論への傾斜——大内力の社会主義論批判——  
毛利晴信 国家独占資本主義の危機の救済主を買ってでた日共  
森下真一 全通労組における協会・向坂派の反労働者的役割  
豊福一造 社会主義協会——その分裂と破

産の過程  
清田 勝 社会党の「新中期路線」批判  
内木田得造 教育労働戦線における日共系の生態  
勝沼 毅 国鉄の戦闘的労働者に敵対する日共分子  
中郷登志男 日韓-米韓韓獄暴露の新局面  
山中太郎 サダトのイスラエル訪問とアラブの分解  
牧原光良 袴田除名の意味するもの  
諏訪幸一 宇宙空間における米ソの核軍拡競争  
唐馬 剛 革命はいかに裏奪されたか？(下)  
吉本龍司 帝国主義にかんする<無知と無恥>の集大成 その3 黒田理論への屈服(下)  
水木章子 テンヤワンヤの四トロ集団  
遠藤四十郎 なりふり構わぬクレムリン弁護論  
山谷 進 権力の操り人形=解放派の惨状——「社青同第14回大会」なるものをめぐって  
永田 浩 ブクロ屋敷の崩壊を告白した野島三郎  
等々力新一 氣息えんえんたる謀略追認集団  
彦根三郎 総瓦解する最末期のスパイ集団  
美津野大雪 第八次謀略を粉碎せよ

第55号 (1978年7月) 1200円

宮原高男 日本共産党第14回大会路線批判  
酒田誠一 ネオ・スターリニズムの虚妄 その1  
大沢達夫 日共の「革新自治体建設」路線の破産  
永野信次 「経済の民主化」のエセマルクス主義的基礎づけ——芝田進午の「労働の経済」なるものについて——  
半沢 貫 日中貿易拡大の意味するもの  
吉本龍司 進展する日本経済の軍事化

中央学組委 核軍事体制強化の策動に反戦・反安保闘争の爆発で反撃せよ  
田辺康之 貨物削減・合理化攻撃を粉碎せよ  
前田晴子 出版資本の合理化に抗して  
栃折 薫 新聞資本の合理化攻撃の嵐と新聞労連中央の腐敗  
鈴木鈞一 印刷産業における「減量経営」の実態と反合理化闘争  
岩村 武 “国民春闘” —その危機と腐敗  
森下真一 第二組合との野合を策する全通中央  
熊田明和/鬼塚龍三 <現代の謀略>の諸形態とその追認の構造  
野田源太 急増する首都圏での鉄道謀略  
藤沢幸男 演出された「空港管制塔占拠」  
木村浩志 政争の具に転落した「三里塚闘争」  
葛城淳一 ジェット闘争の裏切りをいなおる駄馬=中野一派  
<声明> 東京地裁による公訴棄却決定を粉碎し水本事件弾劾闘争をさらに推進せよ [付] 対照表-地裁決定と“酷似”した中核派のデマ  
高浜 覚 わが革命的左翼の飛躍にむけて

第56号 (1978年9月) 1200円

関西地方自治体労働者委 「革新自治体」の崩壊にうろたえる日共  
松沢洋三 末期の美濃部都政  
福田光行 都職労戦線における向坂派の没落  
瀬戸 健 スト権奪還闘争の再構築のために  
立川純男 全通中央の歴史的裏切りとその根拠  
瀬山尚忠 革命的反戦闘争の前進のために  
酒田誠一 「人間の顔をした」スターリン批判——ネオ・スターリニズムの虚妄 その2  
宮原高男 日本共産党第14回大会路線批判

(下)  
清田 勝 日本型社会民主主義者の白昼夢  
島村健康 トロツキー『わが生涯』を讀んで  
安原 純 中国「五人代」の特質  
高村淳一 フランス左翼連合の惨敗——不可避となったユーロ・スターリニズムの危機  
金剛岳三 日ソのサケ・マス交渉の意味するもの  
今 克敏 スパイ粛清で最末期のブクロ派スパイ集団  
猪飼春樹 ブクロ官僚の錯乱と詭弁——「朝鮮侵略粉碎闘争」から「日韓・安保闘争」へ  
官許の武闘——5・20  
続々と暴かれる「三里塚ゲリラ」の真相  
スパイ=北小路敏の二重生活  
富谷昌平 東京大学における四位一体の組織破壊攻撃——4・10マル研究室放火から6・7襲撃粉碎の闘いまで  
片桐 悠 ブクロ官僚派のソ連論——錯乱の集積  
吉本龍司 帝国主義にかんする<無知と無恥>の集大成 その4 没経済学の真骨頂

第57号 (1978年11月) 1200円

西銘大吉 「減量経営」の実態と総評の「雇用闘争」批判  
河原清志 合繊独占体の再編成と減量経営の実態  
沢渡 遙 <円高>と日米の経済的争闘  
小泉伸一 帝国主義的争闘の新たな局面  
吉本龍司 危機にたつ変動相場制——国際管理通貨体制の終焉  
篠田 剛 向坂派組織路線の批判  
酒田誠一 「人間の顔をした」スターリン批判——ネオ・スターリニズムの虚妄 その3

大島秀子 「レーニン主義」を放棄したスベイン共産党  
 久住文雄 軍縮のイデオロギー批判  
 飯島 茂 軍縮の政治学の陥穽  
 谷田三夫 分解と混迷をあらわにした総評大会  
 不動 巖 書評 小説『上海人脈・黒い龍』を読んで  
 政治組織局 同志中村功虐殺を弾劾し開始された第九次謀略に反撃せよ  
 鬼塚龍三 追認なき〈三里塚ゲリラ〉  
 橋川達二 「現代の黒百人組」への純化  
 猪狩 辰 大混乱の「日韓・安保闘争」論  
 政治組織局 謀略粉碎闘争のただなかでの組織建設  
 初音幸彦 「政治警察」への新たな忠誠——「カクマル中枢分裂」の妄想にふけるスパイ＝清水のたわごと  
 土門 肇 最終局面のブクロ派内中枢分裂 無能官僚・藤掛守の“破滅”  
 長門伴蔵 戦争ロボット人間の内面的崩壊(上)

**第58号 (1979年1月) 1200円**

松代秀樹 資源潤渴ベシミスト・大内力の寝言——社会党「中期経済政策」批判  
 工藤作三 向坂派「体制的合理化論」批判  
 鳴海 武 現代の合理化をどうとらえるか?——杜学著『わが革命をめざして』を読んで  
 牛島米造 国労におけるレッド・ページ粉碎の闘い——前進する黒磯反処分・反弾圧闘争  
 無署名 鄧小平来日を弾劾せよ!  
 半沢 貫 北京官僚の新たな党内＝権力闘争  
 安原 純 ドラスチックに転換する中国の経済政策  
 伴 邦人 現実化した中ソの代理戦争——長期化するベトナム＝カンボジ

ア戦争  
 伴 邦人 中国＝ベトナム紛争の意味するもの——自主独立路線の末路  
 水木章子 日中条約をめぐる四トロの大混乱  
 斑鳩高志 ソ連・中国の世界支配戦略と日本帝国主義  
 占部四郎 第三の走狗に転落した第四インター  
 大野道夫 死にぞこないの第二の走狗＝解放派  
 長門伴蔵 戦争ロボット人間の内面的崩壊(下)  
 師門正樹 ブクロ版「シリコンラバー物語」のウソとデマ  
 彦根三郎 最末期を迎えた「総路線闘争」  
 清島 究 スターニニズムの蒸発をめぐる没理論的抗争  
 山代冬樹 権力直轄下の走狗を絶滅せよ  
 無署名 「有事立法」粉碎・防衛二法改悪阻止の革命的反抗闘争を推進せよ  
 浅川利一 国防イデオロギーの虚偽性——『防衛白書』批判  
 仁科五郎 ロッキード裁判をめぐる政治エリート抗争  
 大空伸男 書評『毎日新聞研究』を読んで  
 唐木迅平 『共産党宣言』における若きマルクスの思想(上)

**第59号 (1979年3月) 1200円**

吉本龍司 開始された「有事立法」制定の攻撃  
 篠田 剛 社会党の護憲運動への曲線のりこえて  
 宮原高男 代々木式「有事立法」反対闘争の欺瞞性  
 照喜名実 破産した「平和教育」運動  
 市川 広 「非同盟」主義に転落した日本共産党  
 酒田誠一 「国家主権」主義のディレンマ——「有事立法反対闘争」をめ

ぐって大混乱の日本共産党  
 彦根三郎 「有事立法」をめぐる公明党のジグザグ  
 矢吹乙吉 日共の「大学防衛」路線——その本質と役割  
 牧原光良 田口グループ「追放」の背景  
 阿蘇平八 自由思想家の自由な幻想——藤井一行『社会主義と自由』について  
 マル学同早大総支部 早稲田大学における日共の凋落と組織的三分解  
 黒金哲男 造船重機産業における経済の軍事化と減量経営  
 初音幸彦 動労組織破壊分子の最後的一掃のために  
 全通委員会 爆発した全通反合反マル生闘争  
 豊後六郎 カーターのインフレ対策  
 沢渡 遙 カーターのドル防衛政策  
 毛利晴信 ドル帝国の没落  
 松代秀樹 深刻化する日本経済の危機  
 高岡基雄 宇野派からの“離陸”——協会オルグ・鎌倉孝夫のばあい  
 百瀬 忍 延命を模索するスパイ野島  
 立山 登 権力内抗争にひきまわされるブクロ派  
 猪飼春樹 権力との「基本関係の変動」に大恐慌の走狗  
 磯田八郎 東北大学事件の真相——解放派による中核派襲撃の意味するもの  
 飯野克子 書評：メドヴェージェフ著『共産主義とは何か——スターリン主義の起源と帰結』を読んで  
 燃えあがった「むつ」現地闘争——ルポ 佐世保・1978年10月

**第60号 (1979年5月) 1200円**

柳津 弘 深刻化する国家独占資本主義の病魔  
 吉本龍司 難産の欧州通貨制度  
 中央労組委 79春闘における革命的労働者

の任務  
 岩村 武 急ピッチで進行する労働戦線の右翼的再編  
 中央労組委 危機にたつ日本労働運動の左翼的転換を  
 速水出夫 中国のベトナム侵略弾劾の闘いをまき起こせ  
 早川志朗 ベトナムのカンボジア侵略に労働者的怒りを  
 半沢 貫 米中の相互瞞着  
 飯田武司 鄧小平体制の「勝利の祭典」  
 酒田誠一 クレムリン官僚スースロフ派の新戦略  
 葉室真郷 現実ばなれした代々木官僚の「非同盟・中立」政策  
 奥野広史 軍縮論者たちの驚くべき幻想  
 中央労組委 「有事立法」粉碎闘争の意義と教訓  
 三好剛治 教育の帝国主義的再編の現段階  
 猪飼春樹 野島三郎の荒唐無稽な試行  
 萩原 満 「保革連合政権」をめざす公明党  
 福田光行 都知事選挙“太田擁立”をめぐる社会党の大混乱  
 山田鉄生 ダグラス・グラマン疑獄の実態  
 唐木迅平 『共産党宣言』における若きマルクスの思想(中)

**第61号 (1979年7月) 1200円**

美津野大雪 中・ソ代理戦争——現代スターリン主義の荒唐の極  
 越野完治 ベトナムのカンボジア侵略を正当化する日共  
 岩本 武 スターニニスト国家間戦争のもとでの日共のクレムリンへの接近  
 瀬山尚忠 日共官僚の愚劣な饒舌  
 三好剛治 ハノイ官僚万歳主義に転落した日本型トロツキスト  
 南部周平 動揺を深めるASEAN  
 君塚 誠 ポル・ポト政権下のカンボジア  
 山住 広 鄧小平の中国から離反したアル

パニア  
酒田誠一 社会主義ニヒリズムに転落した菊地昌典  
大道正也 航空機疑獄弾劾の反戦闘争を推進せよ  
宮原高男 暴露されたダグラス・グラマン疑獄  
小泉伸一 戦後軍用機疑獄の系譜  
毛利晴信 インフレーションに悩むアメリカ帝国主義  
松島武夫 爆発したイラン王制打倒闘争  
柴山昌郎 「自由と民主主義」をめぐる日共の分裂  
五井幹夫 「企業の民主的規制」方針の反労働者性——日共の79春闘方針批判  
豊福一造 西欧型社民への道——社会党第43回大会のしめしたものとびだした「階級決戦」方針の秘密  
久山郁夫 権力にすがりついた野島三郎開始された謀略——3・5、3・16襲撃事件の真相  
馬脚をあらわした「三里塚ゲリラ」  
唐木迅平 革命実践の論理——『共産党宣言』における若きマルクスの思想(下)  
日暮雪子 感性の覚醒と変革と  
島村健康 鉄面皮な自己欺瞞と偽造

**第62号 (1979年9月) 1200円**

松代秀樹 東京サミットをめぐる国際情勢  
小泉伸一 石油危機の下での東京サミット  
豊後六郎 「東京宣言」にあらわれた相互瞞着の構図  
沢渡 遙 OPEC三月総会のしめしたものの  
山田鉄生 自民党内派閥の“恐怖の均衡”  
大道正也 原子力発電開発を阻止せよ  
岩村 武 最後の的に破産した民同型春闘——事実上の「ストなし」に終わった79春闘——

自治体労働者委 ふきあれる自治体労働者への攻撃  
柄折 薫 新聞産別における人員削減攻撃との闘い  
林田孝志 対馬ソ連論の批判  
新城 薫 追悼 対馬忠行  
林田孝志 敬愛するわが「孤独なイデオログ」の死  
白磯健司 岩田=川上式労働者管理論のまやかし  
無署名 専修大学の二同志の虐殺を弾劾する  
水沢 徹 スパイ狭間に牛耳られた青解派  
鬼塚龍三 断末魔のふたつの走狗集団  
平塚健吾 「三里塚闘争」の最後の瓦解への悲鳴——「前進」934号「政治局論文」の内実——  
謀略性のあらわなサミット謀略  
前進する動労千葉地本再建の闘い  
辰野一平 書評：柴田穂著『毛・周以後の中国』

**第63号 (1979年11月) 1200円**

酒田誠一 凄絶な思想的風化  
伴 邦人 「市民社会主義者」平田 清明の思いあがり  
古井克夫 「マルクス主義の 西欧文明的限界」をあげつらう湯浅赳男  
河内行生 <軽み>の世界にただようプラグマチスト  
白磯健司 “変節有理”の菊地昌典  
高村淳一 侵略を賛美する代々木官僚  
山住 広 中・ソ代理戦争の勃発で大混乱のブクロ官僚  
金剛岳三 驚愕と分解の再編成——公認共産党の惨状——  
半沢 貫 破綻した「四つの現代化」——五全人代第二回会議をめぐる  
中央学組委 中・ソ代理戦争弾劾の闘い——その理論的諸教訓——  
柳津 弘 <第二次石油危機>にゆらぐ帝国主義諸国

高松吾郎 最終段階に入った労働戦線の右翼の再編成をうちくだけ  
土岐多加志 どんづまりにきたく現代の謀略>  
如月慎吾 サミット謀略の実態と本質  
現地報告 サミット謀略の真相を暴く

**第64号 (1980年1月) 1200円**

政治組織局 走狗集団ブクロ派解体闘争の勝利——清水丈夫の妄想的体系の全面的な破壊——  
政治組織局 「本多=清水」路線の埋葬  
中央学組委 スパイ清水失脚の記念碑——「現代戦争テーゼ」の偽造と放棄——  
彦根三郎 ブクロ屋敷崩壊の必然性  
山住 広 暴かれた「三里塚闘争」終幕の舞台裏  
半沢 貫 文化大革命を清算した鄧小平中国——「建国三十周年」葉剣英演説の意味するもの——  
辰野一平 ベトナム「難民」問題の背景と本質  
伴 邦人 「中立化」をめぐる流動するカンボジア  
益目梅太郎 ユーロ・コミュニズムへの屈服——ソポレフ「世界革命過程」論について——  
古井嘉男 ソポレフの「人民民主主義論」について  
片桐 悠 プレジネフ体制とクレムリンの内部抗争  
松代秀樹 「知識労働」論の陥穽——山口正之批判——  
浦上深作 エコロジ的自主管理主義者の白昼夢——津村喬批判——  
青木恒子 自立した思想家の末路——吉本隆明批判——  
市川 広 演出された<第二次石油危機>  
小泉伸一 朴暗殺事件と自民党の分解

**第65号 (1980年3月) 1200円**

大道正也 朴暗殺——その政治的・経済的・軍事的背景  
小泉伸一 アメリカイラン宗教=経済戦争とその波紋  
沢渡 遙 カーターの新エネルギー政策  
白嶺 聖 「安全神話崩壊」以後の原発開発  
君塚俊平 西欧型社民への道と自主管理論——『社会主義への道』批判・大内力見解の陥穽——  
豊福一造 “窮乏化”する協会派理論——「大内力批判」にしめされているもの——  
篠田 剛 社会党・総評の右翼的変貌と進展する労働戦線の帝国主義的再編成  
沖繩県委 高揚した「フォートレスゲイル」阻止闘争とその教訓  
鬼塚龍三 謀略追認拠点=解放派軍事中枢の最期——11・21の闘いで暴露された謀略追認集団の正体——  
口絵 謀略追認の全貌を暴く  
宮原高男 「容帝反共主義批判」の崩壊  
片桐 悠 清水式スターリン主義論の抹殺  
11・16佐藤・小林両同志虐殺の真相  
10・5 誤爆襲撃でふたたび暴露された謀略の決定的証拠  
10・10成田線列車襲撃の狙ったもの  
水木章子 日本型トロツキストの変質の現段階——第四インターナショナル日本支部第9回大会批判——  
菅村隆夫 書評：西野辰吉著『反乱と革命の陰画』

**第66号 (1980年5月) 1200円**

阿賀三敏 ソ連軍のアフガニスタン侵略——その現実と背景  
大館 衛 アフガニスタン問題で終焉をむかえた非同盟主義  
片桐 悠 経済建設の破綻にゆらぐブレジネフ体制  
柳津 弘 イラン経済制裁と国際通貨危機

市川 広 イラン・アメリカ宗教=経済戦争とその背景  
 中央労組委 80春闘の戦闘的爆発をちとれ  
 西鎌悠一 進展する野党勢力の解体的再編成  
 中央学組委 リムパックへの自衛隊派遣を許すな  
 杉村 明 新カーター・ドクトリンの意味するもの  
 毛利晴信 エネルギー政策を転換したカーター  
 中央学組委 <現代の謀略>を最終的に根絶せよ——「日本型赤い旅団」形成の策動をうち砕いた闘い  
 宮原高男 末期の理論的錯乱——三たび登場したニセ津久井論文にみるブクロ派の断末魔——

第67号 (1980年7月) 1200円

酒田誠一 革命なき革命の悲劇  
 松島武夫 ソ連の軍事侵略弾劾の闘いを推進せよ  
 豊島健人 クレムリンの擁護者=四トロ  
 瀬山尚忠 チトー主義の用語を借りた侵略の弁護論——アフガニスタン事件で動揺する代々木共産党——  
 安原 純 変貌する現代中国——中共第十一期五中全会をめぐる——  
 海源はじめ 「現代化」の意味について  
 松代秀樹 進行する金融・通貨危機  
 沢渡 遙 政府・独占体による大衆収奪の強化を許すな——公共料金・諸物価値上げ反対の政治経済闘争を推進するために——  
 柳津 弘 昂進するインフレーション——“軍需景気”のもとでの設備更新・産業構造再編の模索——  
 鳴海 武 自治省版「都市経営」論の批判  
 政治組織局 <謀略粉碎・走狗集団一掃>の闘いの勝利万歳——勝って兜の緒をしめ、残存スパイ集団の

最後の一掃の闘いに決起せよ  
 等々力渉 わが党派闘争の完全勝利  
 雁坂五月 書評：変質の記念碑——ボン選第五巻を読んで

第68号 (1980年9月) 1200円

政治組織局 ブント主義者に制圧されたブクロ派  
 今 克敏 野島三郎の失脚——ブクロ派内ブント主義者による本多路線の清算と地下帝国への屈服  
 片桐 悠 本多延嘉の亡霊  
 早川志朗 走狗の末路を慨嘆する野島三郎  
 宮地五郎 田中清玄にからめとられる走狗集団  
 5・5 桑原助教授への意図的な誤爆謀略殺人事件を弾劾する  
 5・27大経大生への謀略襲撃を弾劾する  
 高村淳一 日共の動揺と欺瞞——アフガニスタン侵略への対応にあらわれたもの  
 大津 晃 「イラン革命」を讃美するブクロ派  
 船原 渉 「スターリン主義の二重性」論の陥穽——アフガニスタン論争で三分解する四トロ——  
 辰野一平 軍縮論者の誤算と誤認——平井友義の「ソ連戦略の誤算」批判  
 開元弥太郎 既成価値基軸の崩壊  
 大道正也 血ぬられた韓国軍政の成立——全斗煥の5・17クーデタと光州蜂起の鎮圧——  
 杉村 明 アメリカ帝国主義の世界支配戦略の転換  
 沢渡 遙 米・ソの石油資源争奪戦の幕あき  
 大館 衛 チトーの死  
 小泉伸一 衆・参同時選挙と自民党内抗争の激化

第69号 (1980年11月) 1200円

政治組織局 80年代支配体制の強化と日本型ネオ・ファシズムの胎動  
 政治組織局 <日本型ネオ・ファシズム>を粉碎せよ！  
 酒田誠一 反ソ民族主義を路線化した北小路徒党——アフガニスタン評論に露出したソ連=赤色帝国主義論  
 遠井新一 清玄の懐に入ったブクロ派  
 <附>60年安保闘争の偽造  
 田代耕一 野島派の党内闘争ならざる党内闘争  
 今西鉄男 走狗集団・青解派の空中分解——狭間残党の日本型ネオ・ファシストへの転生——  
 無署名 7・20同志船田修の虚殺を弾劾する  
 7・25京大生誤爆謀略襲撃の真相  
 志山健雄 日本核武装の称揚者=清水幾太郎  
 葉室真郷 反ソ・ナショナリズムへの屈服——日共式「真の安全保障政策」の虚妄——  
 大兼久志 総評第61回大会のしめたもの  
 萩原 満 無残に破綻した飛鳥田式連合政権構想  
 尾形竜二 ウルトラ反共政党的道をあゆむ民社党  
 鈴出論也 現代の科学技術=ヒリズム  
 灰原進吾 「人類史の危機」についての非哲学  
 折谷 猛 「全面発達論」の陥穽——スターリニスト教育論批判序説  
 沢渡 遙 OPECアルジェ総会の意味するもの  
 松代秀樹 不況のもとで激化する帝国主義間の争闘戦  
 岩室六郎 田中吉六の哲学的難破  
 和名倉一 書評：宗教についての雑感  
 柚口 登 "：中野徹三著『マルクス主義の現代的探究』  
 風間峽夫 "：角間隆著『赤い雪』

第70号 (1981年1月) 1200円

酒田誠一 経済危機のもとでの独立労働組合のための闘争  
 片桐 悠 ポーランド労働者の“勝利”——総括と展望  
 西海 玄 KORの要求についての雑感——第二革命の萌芽？  
 貝原信行 倒錯した支援  
 中央学組委 全学連運動の当面する任務  
 風森 洸 イラク=イラン戦争——その背景と意味  
 牧原光良 代々木式原水禁運動の分解  
 水木章子 国際トロツキストの新たな変質  
 菅村隆夫 党組織論追求の核心は何か——藤井一行『民主集中制と党内民主主義』をめぐる——  
 葉室真郷 ファシズムとボナパルチズム——山口定「比較ファシズム論」の陥穽  
 浅川利一 デマとレトリックで大衆を煽動するネオ・ファシスト——反革命として再登場した清水幾太郎  
 政治組織局 怒りも新たに——戦闘的労働運動の暴力による破壊を粉碎せよ  
 『意見書』公表に露呈したブクロ派の<党内闘争ならざる党内闘争>の真相  
 矢嶋達夫 解説 国鉄合理化攻撃の現段階

第71号 (1981年3月) 1200円

無署名 日本型ネオ・ファシズム運動を粉碎し労働者階級の怒濤の前進を  
 柳津 弘 連動する危機のもとでの帝国主義間争闘戦の激化  
 柳津 弘 生産性の向上に狂奔する日本帝国主義  
 山田鉄生 危機に立つドル帝国とレーガンの登場  
 沢渡 遙 イラク=イラン戦争の経済的波紋

山上信男 開始されたネオ・ファシストの挑戦——西ヨーロッパで統発する無差別爆弾テロ

松代秀樹 国家独占資本主義の直接的生産過程(上)——坂本和一『現代資本主義の生産様式』批判

岸部 亘 現代の巨大技術と労働——内山節『労働者の挑戦』に揺らぐ米国型商品生産」をめぐって

菅村隆夫 プーリンはいかに評価されてはならないか——メドヴェージェフ著『失脚から銃殺まで=プーリン』について

<声明> 10・30五同志虐殺の謀略に階級的反撃を

酒田誠一 岐路に立つポーランド労働者

阪谷耕三 グダニスク造船所ストライキへの共感と連帯

館野直子 「独立労組」結成の闘いに想う

相田 明 ポーランド映画「大理石の男」を観て

水木章子 「政治革命」の空疎な号令——第四インターの“ポーランド方針”批判

橋津 武 「ポーランドの夏」の教訓

片桐 悠 ソ連経済の深まる危機

安原 純 経済困難と権力闘争にゆらぐ鄧=趙中国

**第72号 (1981年5月) 1200円**

中央労組委 81年春闘と革命的労働者の任務

山田悦太郎 『81国民春闘白書』批判

西鎌悠一 日本社会党のイデオロギー

中央学組委 革命的學生運動の当面する任務

津山純一 路線的対立と組織的分解にあえぐ日共——五中総のあらわにしたもの

今賀千安 スターリニスト党と労働組合——スターリン式「ベルト」論の反プロレタリア性

霧原広介 レーニン民族理論の歪曲——佐々木・聴濤「社会主義と民族自決権」批判

瀬山尚忠 日共式ソ連弁護論の破産——アフガニスタン—周年論文のまやかかし

斑鳩高志 ユーゴスラビア型非同盟主義の批判

半沢 貫 毛沢東中国の清算——華国鋒失脚の背景と意義

松代秀樹 国家独占資本主義の直接的生産過程(下)

政治組織局 日本型ネオ・ファシストの錯乱と挑発

山住 広 挑発者の本性の自己暴露——北小路一派のポーランド論について

佐伯 念 政治主義者のソポレフ論

**第73号 (1981年7月) 1200円**

前尾進吾 「生産性基準原理」批判

赤目 忍 統一労組懇の81春闘方針批判

菅原哲也 同盟の『賃金・政策闘争白書』批判

化学労働者委 合化労連中央の春闘方針批判

金属労働者委 全金中央の“一発回答方式”への転落を許すな

堅井博光 賃下げ・労働強化をねらう鉄鋼独占体

電機労働者委 電機労連中央の春闘方針批判

沖縄県委 沖縄における主任制阻止の闘い

酒田誠一 分解し混迷する「連帯」

酒田誠一 回避された無期限ゼネスト

館野直子 書評：ワレサの“威光”を利用する富塚——富塚三夫他著『自立への熱望』——

坂崎明朗 季節はずれのソ連弁護論——高沢寅男批判

清田 勝 向坂派の「未成熟な社会主義」論の欺瞞性

辰野一平 日本共産党の“護憲”闘争論批判

小泉伸一 江藤淳の改憲論の時代錯誤

柳津 弘 “鈴木喜一”政権の総合安全保障戦略批判

山田鉄生 アメリカ支配階級のあらたな内部抗争——しくまれたレーガン狙撃事件の構図と背景

無署名 謀略的誤爆襲撃弾効!

大野 泉 書評：「チュチェ思想について」を読んで

菅村隆夫 書評：山口定著『ファシズム』を読んで

**第74号 (1981年9月) 1200円**

島岡平定 国労・動労共闘の前進

黒岩重遠 人勲依存を純化した民間型賃闘路線

笠置高男 春闘の闘争=組織戦術の解明に関する諸問題

夏樹俊秀 全連本部の制度・政策要求路線の批判

立川 優 郵政版「減量経営」とは何か?

反谷則路 「連帯」委員長ワレサの思想なき「思想」——来日中の言動についての二、三の感想

吉本龍司 労働力の価値論——賃金の本質論のために

松代秀樹 独占利潤論へのアプローチ

白嶺 聖 原子力発電への協力と跪拜——日共の「原発の自主的・民主的開発」政策の反労働者性

早川志朗 日米共同声明の意味するもの

片桐 悠 ソ連スターリン主義の晩鐘——ソ連共産党第26回大会について

柳沢幹人 中・ソ対立の歴史的展開(上)——その現実的背景と理論的根拠

**第75号 (1981年11月) 1200円**

早川志朗 運動=組織論の形成

瀬山尚忠 革命的學生運動の基本構造

大牟田龍太郎 統一行動論の深化のために

片桐 悠 「再生」に賭けるスターリニスト党=国家官僚——ポーランド統一労働者党大会の照らしだしたもの

水木章子 協調と犠牲と屈服のすすめ——佐藤経明の「ポーランド事件の政治経済学」について

中央労組委 81春闘の敗北をのりこえて

永井道範 統一労組懇の階級的裏切り

笠置高男 「経営参加」路線の反階級性

柳津 弘 コンピュータ合理化と国家独占資本主義の転型——日共版「マイコン革命」論批判

宇津宮研 日共版平和綱領の虚妄性

今賀千安 北小路一派の「反核闘争」の内実

無署名 スパイ集団・青解派の終焉

柳沢幹人 中・ソ対立の歴史的展開(下)

**第76号 (1982年1月) 1200円**

小早川勝興 深まる米ソ代理戦争の危機

瀬山尚忠 日共式平和運動の破産の紋章

浅戸新一 「民衆の連帯による軍縮」論の虚妄——坂本義和批判

古在信太郎 米・ソ核実験反対闘争の教訓

仁井田貞義 70年安保=沖縄闘争の理論的諸教訓

倉沢傑然 統一行動についてのブクロ官僚の偽造

柳津 弘 81年度版『経済白書』批判

笠置高男 大混乱の「統一労組懇」路線

無署名 ハンガリア革命25周年にあたって

会津伴子 反帝・反スタ世界革命の実現をめざして

片桐 悠 左傾化しつつある「連帯」

伴 邦人 「社会主義神話」の崩壊の弥縫——不破のポーランド評論批判

影浦 烈 スウィーギーの妄想=「革命後の社会」(上)

第77号 (1982年3月) 1200円

無署名 「連帯」への武力弾圧を弾劾する  
 水木章子 軍専制への小ブルジョアの反発  
 酒田誠一 「自主管理 共和国」の幻想  
 笛吹 渉 「社会主義の再生」の神話  
 阪谷耕三 工藤幸雄著『ワルシャワの七年』  
 を読んで  
 鬼塚龍三 北小路一派の降伏の紋章  
 宮尾 登 走狗四トロの階級的役割  
 菅原哲也 同盟「行政改革断行」論批判  
 五井幹夫 「労働戦線の統一」の階級の本質  
 篠田 剛 分裂の危機をはらむ日本社会党  
 彦根三郎 「国家=国民」イデオロギーの  
 虚構  
 風森 洸 国際情勢の新たな激動  
 左京郁夫 宗像誠也教育論批判  
 那須 学 許萬元のヘーゲル解釈について  
 影浦 烈 スウィージーの妄想=「革命後  
 の社会」(中)

第78号 (1982年5月) 1200円

片桐 悠 「連帯」の悲劇  
 伴 邦人 「社会主義国」における軍専制  
 の意味するもの  
 水木章子 「内乱」を呼号する四トロの錯  
 乱  
 浦上深作 日共官僚の動揺と困惑  
 高村淳一 第三の道への転進  
 影浦 烈 スウィージーの妄想=「革命後  
 の社会」(下)  
 半沢 貫 経済困難にあえぐ鄧小平中国  
 毛利晴信 ミッテランの国有化政策  
 松代秀樹 深まる日本経済の危機  
 中央労組委 82春闘における革命的労働者  
 の任務  
 永井道範 統一労組懇の分裂主義  
 無署名 減税闘争へのすりかえを弾劾せ  
 よ  
 無署名 「準備会春闘」を許すな  
 古在信太郎 「先制的内戦戦略」の放棄

大牟田龍太郎 61年米・ソ核実験反対闘争  
 の教訓  
 新田拓次 72年ベトナム反戦闘争の理論的  
 教訓

第79号 (1982年7月) 1200円

国鳥鉄也 反階級的な「統一労組懇春闘」  
 方針  
 長浜精一 「内需拡大春闘」論の錯誤  
 菅原哲也 同盟『82年度賃金白書』批判  
 前尾進吾 減税・行革をめぐる政府内対立  
 鳴海 武 加藤寛「行政改革論」の反動性  
 伊佐 治 「右より再編」反対闘争の理論  
 的諸教訓  
 黒金哲男 レーガン軍事戦略とアメリカ帝  
 国主義経済の軍事化  
 酒田誠一 「労働者自主管理」の蹉跌  
 久山郁夫 ヤルゼルスキ軍政の免罪——佐  
 藤経明批判  
 蓮台寺陽 「連帯」とソヴェト——藤村信  
 批判  
 片桐 悠 プレジネフ体制の終焉  
 半沢 貫 人民公社解体の意味するもの  
 大道正也 反核・軍縮運動の空想性  
 無署名 走狗集団の逃げ場=「三里塚闘  
 争」の最期的瓦解

第80号 (1982年9月) 1200円

真教寺峻 福祉国家の幻想——日共式「国  
 民本位の行革」なるものの本質  
 辰野一平 日共式労働運動論の反階級性  
 白磯健司 反合理化闘争の放棄——統一労  
 組懇の労働運動方針批判  
 中央労組委 82春闘=日本労働運動の終焉  
 無署名 日本型ネオ・ファンズム運動と  
 謀略  
 鬼塚龍三 組織と主体性  
 高村淳一 「核兵器の一方的廃棄」を夢想  
 するE・P・トンプソン  
 芦田重雄 「非核地帯設置」構想の観念性  
 白嶺 聖 「反核・軍縮」の日共式基礎づ  
 け——われわれの批判による動

揺と混乱そして破綻の隠蔽  
 大沢壮一 川上忠雄のたわごと——「ポー  
 ランド革命の弁証法」のまやか  
 し  
 林田孝志 若きマルクスの<哲学の実現>  
 の限界露呈  
 南海栄三 学習ノート・「賃金」について  
 の卑俗な解説——ソ連製『経済  
 学教科書』における「賃金論」  
 の批判  
 鳴海 武 大内力「スタグフレーション論」  
 批判ノート

第81号 (1982年11月) 1200円

西銘大吉 メカトロニクスの発展と進む無  
 人化工場  
 大所八郎 厚生省による医療再編成の現段  
 階  
 大滝竜一 「国連依存」の反核運動の現実  
 的破綻  
 無署名 日本権力者内の激化する暗闘  
 辰野一平 全民労協結成の階級的役割  
 筑後大介 集票の具とされはじめた統一労  
 組懇  
 藤谷保之 労働組合運動の左翼的展開とは  
 何か？  
 梨元 始 左翼組合主義的偏向について  
 真教寺峻 日本型ネオ・ファンズム体制の  
 確立をめざす行政の全般的再編  
 成——臨調第一部会報告の意味  
 するもの  
 菅原哲也 行政機構改革の狙い  
 前尾進吾 公務員制度の抜本的改編  
 多々野等 国鉄「分割=民営化」論の反動  
 性  
 白磯健司 「日本国民鉄道」を夢想する代  
 々木共産党  
 百瀬 忍 国鉄再建のための“労使協力”  
 を提唱する日本社会党  
 半沢 貫 鄧小平路線の憲法化

第82号 (1983年1月) 1200円

半沢 貫 八全大会路線への回帰——中国  
 共産党第十二次大会について  
 伴 邦人 「連帯」への心情的共感——工  
 藤幸雄のばあい  
 水木章子 スターリン社会主義論を補修す  
 る佐藤経明  
 秋岡太郎 構造改革論の基本的誤謬——今  
 井則義編著『日本の国家独占資  
 本主義』批判  
 高村淳一 破れかぶれの変節漢=竹内芳郎  
 の命運  
 沢渡 遙 中東和平をめぐる米・ソの激突  
 瀬山尚忠 日共式学生運動論の破産のとり  
 つくろい

足利隆志 82年版『経済白書』の諸特徴  
 永井道範 化学労働運動の終焉  
 習志野実 運輸業についての経済学的アプ  
 ローチ  
 村上文男 宗教批判の一考察——梅本克己  
 「親鸞における自然法彌の論理」  
 をめぐって

<学習ノート>情勢分析と運動論的情  
 勢分析について/いわゆる「賃労働と  
 資本」主義、あるいは基底体制還元主  
 義の誤りの理論的根拠は何か？/運動  
 論的情勢分析からわが全学連の運動の  
 分析がぬけおちるといふことの認識論  
 的根拠について/情勢分析と方針とが  
 二重うつしになる根拠/「情勢分析内  
 容の方針化」の誤りについて/大衆闘  
 争論と運動=組織論の関係は？/方針  
 提起論と運動=組織論とが二重うつし  
 になる哲学的根拠はなにか/方針提起  
 論主義の誤謬はどこにあるか？/われ  
 われの活動の三形態について

第83号 (1983年3月) 1400円

柳津 弘 深まる現代世界の危機  
 松代秀樹 三重苦にあえぐ日本帝国主義  
 足利隆志 日本型ネオ・ファンズム体制へ  
 の転換のシンボル  
 無署名 田中かいらい内閣成立の背景

片桐 悠 プレジネフの死  
水木章子 軍政ポーランドと「連帯」の悲劇  
宮尾 登 新労組法の本質——戒厳令なき戒厳体制への布石  
小早川勝興 マルビナス戦争、その背景と本質  
荒磯 巖 現代兵器の展示場  
稲福 稔 「軍縮」学者・坂本 義和の真夏の夜の夢  
阿蘇平八 コミンテルンの統一戦線論  
山城章一郎 日共式「経営参加」路線批判  
南 清 クラフト著『ソフトウェア労働の変貌』について  
菅村隆夫 情念の変革と解放の哲学——中村雄二郎著『感性の覚醒』を読んで  
北野大吾 大衆闘争論の形成と確立  
筑後大介 「右再編粉碎闘争」の理論的説明上の一教訓  
真竹 豊 人勧凍結粉碎闘争の前進のために

第84号 (1983年5月) 1200円

矢嶋達夫 「交通経済」論の陥穽  
習志野実 「社会間接資本」とは何か(上)  
山田鉄生 国家独占資本主義の構造改革——戸木田嘉久「経済的民主主義」論批判  
柴山昌郎 副島種典の社会主義論のおとし穴——スターリン理論の「左」からの弥縫  
篠田 剛 「参加・分権」による自主管理社会主義の妄想——日本社会党「社会主義の構想」批判  
酒田誠一 プレジネフの〈負の遺産〉  
水木章子 「自制的革命」についての伊東孝之の饒舌  
広瀬悠一 酒田誠一著『革命なき革命の悲劇』を読んで  
古都 肇 マルクスとは無縁な「歴史学の方法」——『前衛』1983年1月

号「転換期に立つ歴史学の方法」について  
尾形竜二 “風見鶏”の答弁術  
大所八郎 医療産業における合理化の実態  
美津野大雪 春季賃金闘争論の深化のために

第85号 (1983年7月) 1200円

片桐 悠 アンドロポフ型二重政策の構造  
君塚俊平 日本社会党の小市民的な構想——日本版ゴードスベルク綱領としての「構想」  
酒田誠一 「社会主義論」をめぐる日共の大混乱  
水木章子 「生成期 社会主義」の没理論的基礎づけ——長砂實の聴濤論文への反論について  
伴 邦人 ポーランド労働者との連帯闘争の教訓化のために  
越谷鉄男 <ソ連圏における第二革命>とは?!  
習志野実 「社会間接資本」とは何か(下)  
菅原哲也 「中成長のための賃上げ」論  
笠置高男 潜在成長力論のまやかし  
木更津久 臨調・最終答申の意味するもの  
荒沢 猛 破綻した行政機構改革  
多々野等 電電「分割=民営化」のねらい  
安岡 豊 梅本克己「組織と人間」について——“主体性論者”の変質  
猪爪裕雅 偽造にもとづく自己正当化の体系——日共「六十年史」の意味するもの  
彦根三郎 マルクス葬送派のたわごと  
穂高岳人 変節と転向を自認した菊地昌典——『絶望の選択——ソソ和解』について  
阿蘇平八 デイミトロフの反ファシズム統一戦線論  
<学習ノート>  
古在信太郎 「情勢分析内容の方針化」について  
山住 広 情勢分析主義について

奥野広史 運動形態の転換の論理について  
伊佐 治 運動形態の転換の論理について  
渡瀬 健 『賃労働と資本』のエンゲルス序文の問題点

第86号 (1983年9月) 1200円

矢嶋達夫 スターリン主義者のサービス労働論について  
仙波 剛 医療サービス労働論ノート——芝田進午著『医療労働の理論』をめぐる  
笠置高男 教育労働の経済学的考察  
藤葛 遼 芝田進午の「労働過程」論の混乱  
筑後大介 完敗した83年春闘の特質  
富戸 学 完全に破産した日共の労働運動路線  
野辺地恒 当面の反戦闘争におけるイデオロギー闘争上の教訓  
数原晴吉 時代錯誤の流民主義  
八重樫稔 没経済学的なマルクス弁護論  
半沢 貫 劉少奇『共産党員の修養を論ず』について  
南海栄三 マルクス商品論の歪曲——ソ連製『経済学教科書』について  
松代秀樹 竹中恵美子「労働市場論」の陥穽(上)  
<学習ノート>  
辰野一平 エンゲルスにおける「価値と労働」  
平野良彦 「価値形成力」について  
第87号 (1983年11月) 1200円  
黒金哲男 資本の先兵=同盟・J Cとの闘い  
永井道範 「インフォーマル組織」への屈服——巨大工場における日共式労働運動の破産  
大山一郎 「ME革命」を礼讃する電機労働労働貴族  
来間作造 自動車産業における合理化攻撃の実態

今村 徹 日本の軍需産業の現段階とその特徴  
柳津 弘 労働の非哲学——「反近代」主義者・安永寿延のたわごと  
菅村隆夫 倒錯した近代主義的労働観批判  
芦田重雄 科学の超階級化——J・D・パナール『歴史における科学』批判  
松代秀樹 竹中恵美子「労働市場論」の陥穽(下)  
松代秀樹 『資本論』における「可変資本」の規定について  
司馬威彦 梅本克己のめざしたもの  
阿部 久 毛沢東哲学と梅本克己——理論社版『人間論』の認識論をめぐる  
林田孝志 黒田寛一の主体性論の欠点  
近藤 学 広松版「哲学体系」の自己宣伝  
高村淳一 文芸評論家・日高普の可能性?

第88号 (1984年1月) 1200円

伴 邦人 ポーランド労働者との連帯闘争の教訓  
片桐 悠 イデオロギー的危機に揺らぐアンドロポフのソ連  
半沢 貫 変質を深める鄧小平中国  
酒田誠一 「二重の過渡期」論のまやかし——斎藤稔の「通説」批判をめぐる  
水木章子 ソ連社会主義の弁護論——藤田勇のばあい  
永井道範 「労働の社会化」論にもとづく管理労働の賛美——島弘「現代企業と経営学」批判  
笠置高男 日共の「経済の民主化」妄想  
宇津宮研 「マルクス批判」の戯画  
影浦 烈 「マルクス葬送」論の葬送——戸田徹の「産業主義としてのマルクス主義・批判」への批判  
阿部 久 広松式エンテクロペディー  
芦村 毅 物象化論の俗流性  
小早川勝興 疎外論なき物象化論の末路



——広松渉の「物象化された運動」論をめぐって

近藤 学 広松渉の国家論解釈の難破  
阿蘇平八 ファンズムと革命の神話

**第89号 (1984年3月) 1200円**

奥野広史 レーニン国家論の構造的歪曲  
片桐 悠 「社会的権力」と国家——広松渉の謬論について  
春山哲夫 「科学としての国家論」の大藪式妄想  
数原晴吉 方法論ぬきの法律学論——『科学と思想』第49号金子勝論文批判  
早池峰豊 今村仁司の労働の形而上学  
荒岩耕作 許萬元の弁証法研究の陥穽  
岩室六郎 黒田主体性論批判のまやかし  
大滝竜一 「非核・非同盟・中立」を越えて

川谷 建 日米首脳会談——その性格と背景  
半沢 貫 胡耀邦来日の意味するもの  
松島貴太郎 現代中国における経済建設論争  
黒金哲男 小集団活動と生産性向上  
左京郁夫 芝田進午の教育労働論の本質  
木更津久 日本帝国主義の深まる経済的危機

**第90号 (1984年5月) 1200円**

電機労働者委 運動=組織づくりの諸教訓  
木曾淳士 資本制的結合労働の美化——元島邦夫『大企業労働者の主体形成』批判  
黒金哲男 高木督夫の「主体形成論」  
中央労組委 日本労働運動の終焉に抗して84春闘を戦闘的に実現せよ  
玄川 卓 労働者をバカにする『84春闘白書』  
鬼塚龍三 変質する陶山の〈党〉  
水木章子 無気力・無展望・無方針をさらけだした第三の走狗=四トロ

酒田誠一 チェルネンコ「復活」の意味するもの  
森山伸夫 先進国革命論者の嘆息——田口富久治の国家論を中心として  
奥野広史 「資本の論理の国家版」の蹉跌  
芦村 毅 「物象化」論の戯画——スターリニスト岩佐茂の「物象化」論批判  
荒岩耕作 「哲学のレーニンの段階」とは何か——統 許萬元の弁証法研究の陥穽

**第91号 (1984年7月) 1200円**

天浪清太 中曽根康弘のイデオロギー  
酒田誠一 党官僚チェルネンコの挽歌  
半沢 貫 日中結託の新たな進展  
呉 英俊 梯明秀の「実践的直観の立場」について  
高山以久子 梅本主体性論の超克をめざして  
那須 学 広松渉の「疎外=化身」論  
崔 史明 わが全学連の入管闘争に学んで  
萌木 素 『現代における平和と革命』におけるソ連論の問題点  
宇津宮研 世界情勢分析をめぐる理論的諸問題  
猪爪裕雅 六一年綱領の珍奇な改訂  
宮原高男 「非同盟・中立・自衛」政策の際限なき変質  
永井道範 「権利としての賃上げ」論のまやかし——統一労組懇の84年春闘アピールについて——

大所八郎 社会保障と賃金と生存権  
永井道範 代々木式経営参加路線の役割  
西銘大吉 「国民本位」の資源利用  
奥間 明 スターリニスト恐慌論の新たな弥縫=混乱  
八重樫稔 「協業」の歴史哲学  
藤葛 遼 エンゲルスの暴力・国家論の検討

**第92号 (1984年9月) 1200円**

葉室真郷 スターリニスト史的唯物論体系の自己崩壊(上)  
山辺哲二 エンゲルス商品交換論の特質  
南海栄三 マルクス価値実体論と宇野説  
吉本龍司 価値形態論の広松渉式破壊  
河原清志 抽象的人間労働は如何に解釈されてはならないか——正木八郎「商品論と抽象的人間労働」について  
柴山昌郎 単純労働、簡単労働、複雑労働について  
大島秀子 四年目を迎えたミッテラン政権  
大島秀子 経済的危機にあえぐフランス帝国主義  
彦根三郎 潰走する陶山の党の新「綱領」——「反帝・反スターリニズム」戦略の放棄を正当化するブクロ官僚  
笠置高男 反帝闘争主義を基礎づけるための情勢論  
宮原高男 ブクロ版現代帝国主義論の大錯乱  
中央労組委 全民労協主導の春闘  
風森 洸 ドル本位制の危機  
帆立進・原巻鮭・稲田靖 索敵における認識と推論  
梅崎夏男 梅本克己の実践論  
北村 隆 広松渉のスターリニスト的錯視  
荒岩耕作 初期マルクス研究は如何になされてはならないか——林田孝志「黒田寛一の主体性論の欠点」を読んで——

**第93号 (1984年11月) 1200円**

浦上深作・白嶺 聖 武谷技術論の継承と破壊  
白嶺 聖 技術主義者の倒錯——星野芳郎「技術の論理」について  
五領 進 技術本質規定の自己改ざん  
浦上深作 技能の規定についての大混乱  
阿部 久 星野芳郎『技術論ノート』の再検討

星谷三郎 武谷技術論の難破  
芦田重雄 資本制的技術現実論と資本制的技術学  
武野芳男 技術本質論と技術現実論  
馬喰 始 ヘーゲル目的論の星野芳郎式解釈  
鬼塚龍三 死にあえぐスパイ集団の反陶山のクーデタ  
酒田誠一 クレムリン官僚ゴルバチョフ派の狙うもの  
畑薙拓也 コメコン・サミットが示したものの  
柚木康明 西欧労働者のストライキ闘争  
山辺哲二 エンゲルスの過程的弁証法について  
塚原幸村 組織指導における機能主義と献身性——党派闘争と謀略の嵐のただなかでの組織建設——  
葉室真郷 スターリニスト史的唯物論体系の自己崩壊(下)

**第94号 (1985年1月) 1200円**

大滝竜一 代々木共産党の路線転換  
酒田誠一 クレムリン官僚の「平和攻勢」——その構造と意味  
伴 邦人 カンボジアの中立化構想  
影浦 烈 スターリン主義インターナショナルへの始動  
五領 進 ゴルバチョフ派の新戦略  
葉室真郷 平和運動路線をめぐる日共中央の分裂  
白嶺 聖 「非武装中立」の彼岸化の完成——自衛隊の「違憲・法的存在」論の意味するもの——  
無署名 自民党本部への火炎謀略ゲリラ  
全斗煥・三里塚ゲリラの正体  
鎌取伸介 「想起する」ということについて  
片桐 悠 唯物史観からの離陸——広松渉の「役割論」をめぐって  
宮尾 登 プレオブラジェンスキーの社会主義社会論の欠陥——書評『社

水木章子 会主義とは何か』——  
対馬ソ連論の意義と限界——わ  
れわれは対馬理論をいかにのり  
こえ継承し発展させてきたか

第95号 (1985年3月) 1200円

酒田誠一 クレムリンの世界支配戦略の転換

片桐 悠 ソ連版社会主義革命論の構造  
葉室真郷 代々木共産党の革命路線の転換  
松島貫太郎 フェドセーエフの社会主義社会論

水木章子 副島種典の社会主義経済学の末路

近藤 学 構改派式国家二重性論の放棄  
半沢 貫 鄧小平式の経済改革  
荒岩耕作 スターリン哲学のデボーリン型  
弥縫——芝田進午の「実践的唯物論」のまやかしを中心として

樋川 亘 若きマルクスの思想的転回  
新田 初 三浦つとむの「認識と表現」について

無署名 謀略と危機管理体制づくり  
松代秀樹 跛行性と腐朽性を深める日本経済

第96号 (1985年5月) 1200円

中央労組委 85年春闘のために  
笠置高男 日共の労働運動路線の転換  
山田鉄生 「労働の社会化」論の山口正之  
式弥縫

天浪清太 ゆらぐ東西分割支配体制  
大滝竜一 クレムリン系平和運動の新転回  
無署名 狭間派解体の闘いの歴史的勝利  
宇津宮研 錯乱を深める走狗集団ブクロ派の  
小官僚

無署名 ゴルパチョフ戦略の構造  
伴 邦人 スターリン式独裁論へのラセン  
的回帰——フェドセーエフのプ  
ロレタリアート独裁論について  
大伴国男 東欧人民民主主義革命の解釈が  
え

篠田 剛 大内秀明の「機能論的アプロ  
チ」について

片桐 悠 イリイチ・レーニンと現代  
八巻進悟 レーニン組織論とわれわれ  
鎌取伸介 対話と認識の弁証法(上)

<年表>1983年~84年の闘い

第97号 (1985年7月) 1200円

早大総細胞 第四次早大学園闘争の理論的  
諸教訓

中央学組委 全国教育学園闘争の新地平を  
きりひろくために

天浪清太 日本型ネオ・ファシズム体制の  
ための教育改革

橋詰勇三 中曽根内閣の反動攻勢  
白磯健司 「根源にたいする闘い」として  
の労働運動とは何か?

大越為有 スターリン的打撃論のもちこみ  
——「赤旗」3・2論文のしめ  
すもの——

鬼塚龍三 謀略ゲリラの追認をめぐる走狗  
集団ブクロ派の新たな分解

酒田誠一 ゴルパチョフのソ連邦——その  
本質と目指すもの

大島秀子 クレムリンに翻弄される“クレ  
ムリンの長女”——フランス共  
産党第25回大会がしめたもの

柚木康明 敗北したイギリス炭鉱労働者ス  
トライキ

麻生雄太郎 「権力共有」提案を拒否して  
闘うボリビア労働者連合の混迷

灰谷みどり レーガンの挑戦とクレムリン  
の逆襲

鎌取伸介 対話と認識の弁証法(下)  
湯本仙吉 武谷技術論の継承と発展

第98号 (1985年9月) 1200円

霜原 透 “悲劇の哲学者”の未完の軌跡  
八巻進太郎 ルカーチ組織論——その意義  
と哲学的限界

芦村 毅 ルカーチ物化論の限界  
大伴国男 投射的思考法を克服するために

島内高雄 結果解釈におちこむことの哲学  
的根拠

笠深陶太 丸山ファシズム論の特質  
柳津 弘 景気後退を深刻化するアメリカ  
経済

松代秀樹 日米の経済的角逐の現段階  
高村淳一 走狗集団のスターリン主義論の  
大錯乱

枝折 進 「黒田理論」妄想患者の憂鬱  
宇津宮研 ブクロ小官僚の降参宣言  
上橋満男 走狗の歌を忘れた山村克

大滝竜一 空想的「核兵器廃絶」論を隠れ  
みのとした路線転換の隠蔽

松島貫太郎 中ソ両共産党の歴史的妥協  
沢渡 遙 ポン・サミット政治宣言の意味  
教原晴吉 いわゆる代行主義について

中央学組委 学生戦線における組織建設の  
前進のために

第99号 (1985年11月) 1200円

吉在信太郎 『資本論』と史的唯物論——  
林直道の歴史主義的倒錯につい  
て——

小山田明澄 『経済学批判』における商品  
論と宇野説

影山光夫 宇野経済学からの大内力の離陸  
高岡基雄 「労働の社会化」とプロレタリ  
アの自己組織化——レーニン  
「工場=労働者の学校」論をめ  
ぐって——

中央労組委 日本型ネオ・ファシズム体制  
を支える日本労働運動の深まる  
荒廃

六分制民営化の反階級性——国鉄再建  
監理委員会の「最終答申」をめぐって  
鬼塚龍三 走狗集団ブクロ派の二分法の必

然性  
黒瀬 薫 ブルジョアの理念に助けをもと  
めた少数派労働組合主義者——  
『労働情報』グループと日本カ  
マトンカチの末路——

酒田誠一 大粛清への狼火——「ゴルムイ  
コ体制」成立の意味するもの

<架空会談> イブモンタン—ゴルパ  
チョフ

<架空会談> 鄧小平—ゴルパチョフ  
水木章子 中国型社会主義論の変質——  
「過渡期階級闘争」路線から「四  
つの現代化」へ

那須 学 ルカーチはなぜ自然弁証法を否  
定したか

九体寺一 北大におけるBC兵器研究

第100号 (1986年1月) 1400円

無署名 ゴルパチョフの真夏の夜の夢  
<座談会> 組織実践論とは何か  
<座談会> 革命主体創造論とは何か

彦根三郎 フェドセーエフ「世界革命過程  
論」の珍釈と正解  
水木章子 岐路にたつポーランド

酒田誠一 ゴルパチョフとりまき体制の形  
成  
伴 邦人 ゴルパチョフのアジア政策

亀田蔵六 「坂潤『科学論』——その生け  
るものと死せるもの  
原野拓哉 広松渉「四肢構造論」の根本問  
題——『存在と意味』緒論につ  
いての走り書きの覚書

三好光太郎 鎌取伸介における革命的マル  
クス主義の風化、だけではなく  
——「対話と認識の弁証法」  
の諸問題について

日本革命的共産主義者同盟・政治組織局 編

革マル派の20年

A5判 344頁  
定価2000円(〒300円)

発売元 革マル派 書房 東京都新宿区早稲田鶴巻町525-15/振替・東京9-105847

## 「解放」 定期購読のご案内 『共産主義者』

たたかう労働者・学生・知識人の武器として革共同革マル派が発行する週刊機関新聞「解放」と政治理論機関雑誌『共産主義者』の定期購読をおすすめします。国際国内情勢の鋭い分析、文化理論戦線へのラディカルな問題提起、労働・学生運動推進のための革命的指針。系統的検討を通して変革主体への飛躍を！

### ◆定期購読料(千共)

「解放」(週刊) 50号分 17200円/25号分 8600円

『共産主義者』(隔月刊) 年間6号分 8700円

### ◆申し込み先

解放社 東京都新宿区早稲田鶴巻町 525-9  
☎ 207-1261 振替/東京 7-144115